



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アリストテレス『分析論後書』における論証と定義：アカデメイアにおける探究論の文脈
Author(s)	千葉, 恵
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 101, 1-57
Issue Date	2000-09-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33977
Type	departmental bulletin paper
File Information	101_PL1-57.pdf



アリストテレス『分析論後書』における論証と定義 —— アカデメイアにおける探究論の文脈 ——

千 葉 恵

はじめに

ソクラテスの「何であるか」という問いのみにより、探究の一切を遂行しようとする試みは多くの困難をもたらした。ソクラテスにとって、探究の目標は勇気や徳であれ倫理的な「ものそれ自体」の定義を獲得することであったが、探究の途上で挫折することを常とした。アリストテレスはそこに明確な方法的自覚の欠如を見て取り、『トピカ』において、彼は「何であるか」を直接問うことなしに、「方法をもっていれば、われわれは提示された問題にたいて容易に議論において対処できる」(101a29f)として、アカデメイアにおける公用の定義論といえる分割法のもとにプレディカビリヤ（述語づけ可能なもの）の理論を展開した。(cf, *Met.* 1078 b17-29) あらゆる問題・命題をそのもとに余すところなく分節するプレディカビリヤを基にトポス（論点）を立てることにより、提示された問題・命題が、例えば定義を形成するのか、そうでないのかを吟味する方法を確立した。しかし、これは通念という枠のなかで、弁証術として議論の方法を展開するものであり、知識 (*epistēmē*) 獲得をめざすものではない。アリストテレスにとって、弁証術は探究論と関連し、有益な情報を提供するが、プラトンや同僚たちがみなしたのとは異なり、探究論とはみなされない。⁽¹⁾

彼は、『分析論後書』特にそのB巻において、科学的知識・学問的知識獲得へ向かう探究論に取り組んでいる。当時、アカデメイアにおいて、問答法や

弁証術の具体的な実践方法として位置づけられた分割法、そしてクセノクラテスに帰せられる本質の推論が知識獲得の探究方法として展開されていた。しかし、アリストテレスにはそれらが適切なものとは考えられず、彼はこれら競合理論との対峙を通じて新たな探究論の構築に向かった。

彼は『分析論後書』A巻において、数学を範型に因果構造のもとに必然的な知識をもたらす一つの推論様式として、論証の成立条件を検討した。彼はB巻において、論証を探究過程に組み込むことによって、新たな探究論構築に向かう。より正確には、論証は、探究という認識経験を求める営みがあるもとにおいて遂行される理論的枠組みであり、それは現実世界における認識経験が学問的知識となるべく、探究を導く規範として機能している。換言すれば、発見的な探究の現場に必然的な論証知を付与すべく、発見知のガイドとして論証が機能している。B巻において、探究の種類の数と同数であるとされる対称性を持つ発見知はいかに必然的な論証知となるのかがめざされる時、探究の一つの項目である「何であるか」を開示するのは従来定義の仕事であるとされてきたために、定義と論証の関係の解明が新しい探究論の主要課題となる。

本稿では、『分析論後書』における発見的探究論に焦点をあてつつ、アリストテレスの定義論の展開を辿る。『トピカ』における本質 (to ti ēn einai 以下 TEE と略記) を意味する類と種差による固有定義の議論を基礎としながら、彼は『分析論後書』において、論証を理論枠として、事物・事象の根拠とそれが持つ必然的属性を定義の対象とする、因果論的定義論を展開している。そのさい、一つの課題は本質を求める「何であるか」の探究と根拠を求める「何故にか」の探究を統一的に理解することである。最初に、これらの探究の学説史を踏まえ、双方の緊張を確認し、それらを統合するアリストテレスの探究論の構想を提示し、そして論証から定義に至る探究過程をめぐる諸問題の解決への彼の取り組みを検討する。論証と定義は関連をもたないという非関連性テーゼに対抗するアカデメイアにおける競合理論はどこに問題があるかを摘出し、彼の探究論がいかに非関連性を克服していくかを、研究者による多様な解釈を許してきた B1-11 の困難な議論の流れを辿ることに

よって、明らかにしたい。そのさい、彼の議論の展開を「本質 TEE」についての私の理解から新たに読み直し、解釈上の諸問題の解決を企てたい。私は「本質 TEE」をソクラテスが「何であるか」の問いにおいて求めたものそれ自体のことであり、ロギコースに（形式言論上）語られるという仮説を立てたが、それがどれだけ探究論の新しい理解に貢献できるかを吟味したい。⁽²⁾最後に「本質 TEE」が『形而上学』においてはいかなる取り扱いを受けているかをめぐり、その方向と線を素描したい。

1

『分析論後書』B1-2において、探究論のアウトラインがその項目と過程の提示により描かれる。冒頭において、探究論が伝統として「学問的に知ること」（以下「学知」と略記）(epistasthai)を求めるものであるということの確認から論述が進められている。探究される事柄は学問的に知られる事柄と同じである。(89b23-25) 探究項目は四つあり、ふたつの過程を経る。「ということ (to hoti)」から「それ故にということ (to dioti)」がひとつのコースであり、他は「あるか (ei esti)」から「何であるか (ti esti)」である。(89b 24f) これらの探究項目を便宜上、順に「事実」「理由」「存在」「何であるか」と表記するが、私はこれらの術語により、以下で構文上説明される以上の意味を含意しない。事実であれ、存在であれ探究対象に何か根拠があるなら、それは学知の対象となる。学知は「端的には」つまり理想的には、事物・事象の根拠とその必然性を把握することである。彼は「われわれは、事物・事象がその故に存在する根拠を、かのものの根拠であり、そしてそれが他の仕方ではありえないと知っていると思う時、それぞれを、ソフィスト的な仕方では付帯的ではなく、端的に学問的に知っていると思う」と言う。(71b 9-12) つまり学知は二つの条件を満たすことによって得られる。一つは、事物・事象の根拠をその根拠として知ることであり、さらに、その根拠故に存在する事物・事象が必然的であると知ることである。アリストテレスは、A巻において、自らの知識論として、学知をもたらすものは、事物の何故にかつまり

因果構造を解明する論証であるとし、その成立条件を考察している。論証理論の構築は必然的に従来の何であるかについて学知を求める弁証術的探究論、知識論との関係が問われる。換言すれば、学知は何故にを説明することによって得られるという見解と何であるかを説明することによって得られるという従来の見解について明確な理解を要求する。はじめに、「何であるか」と「何故にか」という二つの問いがどのような取扱を受けてきたかを学説史の上で概観しておく。

最初に「何であるか」と「何故にか」という二つの問いは学知を求める二つの表現として、当時ギリシアにおいて広く用いられていたものであることを、確認しておこう。「何故にか」は理由や根拠を求める問いとして立てられている。『(自然学) 問題集』においては、例えば風であれ発汗であれ、八百を超すすべての問題項目の提示において「何故に」という書きだしで問いが立てられ、その理由、根拠が種々提示されている。例えば、アナクサゴラスの問いとして、「何故に、夜は昼よりも物音がよく聞こえるのか」が問われ、「～故に」と答えられている。(903a7, cf.985a18) プラトンにおいても「何故にか」は「根拠」とセットで用いられている。『パイドン』においてソクラテスは「私は若い頃に自然についての探究と呼ばれている知恵を求めて熱中していた。というのも、それぞれが何故に生成し、何故に消滅し、何故に存在するか、それぞれの根拠を知ることが、私には素晴らしいことであると思えたからである」と述べている。(96a, cf. *Politicus* 294c, *Lysis* 221c) 伝統として、「何故にか」という問いは、少なくとも自然学において、根拠を求める問いとして用いられ、根拠を知ることが一つの学知を持つことであるということは確立されていたと言えよう。(cf. *Meno* 98a) またアリストテレスは所謂四原因を挙示する『自然学』B3において、何故にかを説明することが根拠を把握することだとしている。「根拠は四つあり、すべてについて知ることは自然学者の務めであり、そして彼はそれらすべてに、つまり質料、形相、動かすもの、目的に導いていくことにより、何故にかの説明をピュシコースに与えるであろう。」(198a22-24, cf.194b17-20, 983a24-29) ここで「ピュシコースに」という表現は、或る具体的な自然上の存在者が何かの根拠となること

の具体的な事例をそれぞれ個別諸科学の原理に基づき探究し、その因果連関を挙示することを意味している。自然学における現実的、ピュシコスな探究の規範として、アリストテレスは論証理論を構築することにより、事物・事象を因果構造のもとにとらえ、何故にかを説明し学知をもたらす条件を提示したと言えることができる。

他方、「何であるか」については、学説史上、「わずかに最初に語り定義することを始めた」のはピュタゴラス派であり、「好機や正義や結婚は何であるか」の説明言表を「数」に結び付けたとされる。(987a20-22, 1078b21-23) ピュタゴラスは「数」が「すべてのものの実体」(987a19)であり「事物そのもの [=事物それ自体]」(987b28)であると語った。一般的には、数学的形式が究極的な実在であり、一切はそれにより構成され、説明されると解された。これは同郷のイオニアの自然学者たちと万物の原理を探究するという動機において機を一にしている。とはいえ、アリストテレスにはピュタゴラス派の最初の定義論は「きわめて簡単に」取り扱われており、不十分である。「というのも、表面的に定義がなされ、語られる定義がそれに第一に属するであろうものが、事物・事象の実体であると彼等は考えたからである。あたかも、二倍が二[の定義]に第一に属するということの故に、二は二倍と同じであるとひとが考える場合のように」。(987a22-25) 定義の説明言表に第一に属するものが、事物・事象の実体であるという考えは、被定義項と定義項の同一性条件の理論がまだ展開されていなかったことを示している。

「何であるか」は定義によって開示されるというピュタゴラスの考えはソクラテス、プラトンに受け継がれる。「何であるか」はソクラテスがそのもとに、具体的な事例に方向づけられたものとしてではなく、事物・事象それ自体の説明言表である定義を形成し学知を求める問いの形式として理解したものであった。ソクラテスは「普遍的に定義することを求めた最初の人」(1078b18f)であるとされるが、問答により、個別的な事例ではなく、普遍的に被定義項それ自体とそれを表わす言表としての定義項の同一性を求めた。しかし、彼は、問答における探究において「何であるか」の問いの形式しかもたず、語の意味であれ、存在を前提にしたものであれ、「何であるか」により探究論を

遂行したことに問題があった。探究対象の定義を得なければ、その対象についてどんな性質があるのかを知ることはできないという、彼の「定義の先行性」の要求は「ソクラテスの誤謬」と呼ばれることもある。⁽³⁾ アリストテレスはそこに方法的自覚の欠如を見出し、当時の「弁証術は「何であるか」なしに、反対なものを考察できるほどまだ強力ではなかった」とし、何であるかを直接問うことなしに、与えられた問題ないし命題を吟味する方法を弁証術として展開したのであった。(1078b25f)

プラトンは「可感的事物・事象は絶えず転化しているので、共通な定義はどのような可感的事物・事象についても不可能である」と考え、「何であるか」をイデアに同化した。(987b6-10)「プラトンはただ二種類の根拠、何であるかと質料に即したもののだけを用いたことは語られたことにより明らかである。というのも、イデアは他のものどもにとってその何であるかの根拠であり、他方、諸イデアにとっては一がそうであるからである」。(988a8-11) ここで「何であるかの根拠」における「の」は同格属格であり、何であるかという根拠の意味である。可感的事物・事象の名前に「それ自体」という語を付加して、別の存在者として作り上げられた不変不動なイデアにこそ、何であるかの定義が成立し、学知が成立する。「イデアの導入」は「言論における究明」つまりプラトンの「弁証術」によるとされている。(987b31f) 生成消滅する人間には定義形成は不可能であるが、人間それ自体は彼の弁証術の実践方法である分割法により定義を与えられる。事物・事象それ自体であるイデアは質料と共に可感的事物・事象の存在の根拠として提示されていることから、「何であるか」はイデアを介して根拠の一つと考えられている。

このように、学説史上明らかなことは、「何であるか」は定義により開示される事柄であり、ピュタゴラスにおいては数が、プラトンにおいてはイデアが事物・事象それ自体として、つまり被定義項と定義項の同一性を保証するものとして、「何であるか」と同定される。プラトンにおいて「何であるか」が事物・事象の根拠として把握されるのは、生成流転するものには定義は成立しえず、イデアにだけ成立するという事情による。この流転する現実世界についての学知はそれと同名のイデアについて定義を獲得することによって

だけ、それらの事物・事象の「何であるか」を把握したことになり、それ故にアイデアはそれら流転する事物・事象の根拠であるという性格を持つ。従って、プラトンにおける「何であるか」を一つの根拠とすることは彼の存在論に基づいている。しかし、彼の存在論を括弧に入れたうえで、定義論として論じることは可能である。プラトンの定義論は弁証術の実践方法である分割法によるものであるが、その難点の指摘と克服は『分析論後書』の一つの課題となっている。

学説史上はプラトンに至るまで「誰も本質 TEE つまり実体を明瞭に説明したひとはいない」(988a34)ということは語りうる一つの確かなことがらである。「何であるか」は定義によって開示されるところのものであるが、定義論が確定しないかぎり、この実質も定められないので、「何であるか」はこの段階では、アカデメイアの通念として、以上のような学説史を経たものとして了解されているものという把握にとどめておく。「何であるか」と「何故にか」の接点を学説史上探すことは難しい。それは「何であるか」が従来定義により開示されるものとされてきたことは明らかであるが、定義そのものが何であるかが明確でないために、定義と根拠の関係が明らかにはされていないからである。ただ、ピュタゴラスやプラトンが、自ら自覚していたかどうかは別にして、事物・事象の存在の根拠をその定義を構成する主要素として提示していることは、説得的な定義論を構築するための、重要な学説史上の事実である。

アリストテレスにおける知識論の課題は「何であるか」と「何故にか」の接点をさぐることだと言える。換言すれば、定義と論証のそれぞれを明らかにし、両者を関連づける一つの知識論を形成することがめざされる。「何故にか」の探究プロセスと「何であるか」の探究プロセスを、学知把握のプロセスとして、いかに関連づけるかが、『分析論後書』B巻の課題であることを、これまでの学説史の論述から確認できたこととしよう。

2

『分析論後書』B巻冒頭において、アリストテレスは探究論の伝統にならい「学問的に知ること」をその目標にしていることを提示している。(89b23) そして、そこで探究項目と学知項目の同数性を一つのテーゼとして立てている。事実の問いについて学知が成立し、存在の問いについても、また理由や何であるかの問いについても学知が成立することを主張している。探究の種類の数と学知の種類の数と同数性を「同数性テーゼ」と呼ぶことにする。四つの探究項目の提示は、学知をめぐる二つのコースによる探究の確認として、構文論的な制約を課すことにより、提示されている。はじめに、これらの構文上の分析を行う。冒頭の四つの探究項目の提示の様式は文法上不揃いのように見える。to hoti は平叙文を導く接続詞に冠詞が付され「～ということ」を意味する。to dioti は「元来 dia touto hoti ～(～であることの故に)＝なぜなら」を原形としている。⁽⁴⁾ この二つは接続詞 hoti から形成されているためにセットで提示されている。だが、to dioti という表現において、接続詞の機能は、単独の術語としてとって代われ、定冠詞が付され後続文をもたない時は、名詞化されており「理由」と訳して問題はないと思われる。to hoti に関しても同様であり、単独の表現は「事実」と訳して問題はないと思われる。⁽⁵⁾ to dioti が単独で用いられず、理由節を導く時は「なぜなら～ことの故に」と訳され (eg.94 a4), 被説明文を導く時には間接疑問として「何故に～か」と訳すか、「～ことの理由」といういずれかの訳になる。(eg.89b14, 89b30f) B 1の使用例を示せば、「われわれは地球が何故に蝕を蒙るかを探究する。(to dioti ekleipei zēthoumen)」(89b30f) という仕方で、間接疑問として訳すのが自然に見えるが、「地球が蝕を蒙ることの理由」と訳すこともできる。to dioti の統一性からすれば、「～の理由」と訳したほうがよい。実際、探究項目の提示という同じ文脈のなかで、(to) dia ti という、明らかに疑問を表現する句が用いられるので、dioti は単独では「理由」を、理由節を導く時は「なぜなら～の故に」と dia ti に対する応答文として理解し、被説明文を導く時

は「～ことの理由」とすることがアリストテレスの真意に沿っている。

後二者は「あるか (ei esti)」、「何であるか (ti esti)」という疑問詞である。これらに関しては、文法上、双方とも疑問詞による表示であり、接続詞を基礎にして作られた前二者とは不調和のように見える。しかし、「あるか」は間接疑問文であり、それに対する応答は、彼の例示からして平叙文を導く接続詞表現「あるということ (hoti esti)」(89b34, 90a2) となり、先の to hoti と同一になってしまう。実際、アリストテレスは「あるか」は語義が曖昧であり、誤解が生じるために、「私は、あるか、あらぬかということを、端的に語っており、[何か] 白であるか、あらぬか [という意味で] 語っているのではない」(89b33) と、この問いによって単称項を主語として存在を問うということを明確にしている。さらに、応答としての「あるということ」を「部分的に」と「端的に」に分け、「部分的に」ということで複合的な文を想定している。(90a2) 例えば、一つの事物・事象を部分に分けて、「はたして月は蝕を蒙るかそれとも増大するか」(90a3) のように、月蝕が「月」と「蝕を蒙る」という仕方で分節されて、探究されるものであるとし、「端的に」という仕方で問われる「あるか」から区別している。to hoti の疑問形は事例からして、「はたして～か否か (poteron-ē mē)」(89b25) であるが、この形式でも存在は問いうるので、先のように事実と存在を接続詞 hoti と疑問詞 ei で区別し、さらに前者を「部分的に」、後者を「端的に」という仕方で限定し、問いの様式つまり単称項を主語にした存在の問いと複合項からなる主述連関の問いとして、差異を保っている。事実と存在をめぐる探究表現の構文論上の限界を、端的や部分的というやはり形式的な構文上の限定により双方の問いとしての相違を明確にしている。to dioti は to hoti が接続詞で提示されたので、それに合わせただけであり、例示されるように「何故にか (dia ti)」という仕方で疑問形で表現しても問題はない。(90a1, a16f)⁽⁶⁾

問題は「何であるか ti esti」である。これに対する応答を導く接続詞は再び hoti であろうが、それでは形式的に先の部分的なあるつまり事実の応答と区別がつかない。それ故に、彼は応答として「何であるか to ti esti」という仕方で、疑問文に冠詞を付していると思われる。(eg.90a36)「何であるか to

ti esti」という表現は明らかに肯定的にも用いられる。「何であるか(to ti esti)はすべて全称で肯定である」(90b4)と推論との差異の特徴として言われている。しかし、それも疑問文の術語化として用いることもできるので(eg.90a1), 文脈に応じて判断するしかない。明確なことは、問いそして応答としていかなる複合文も入りえず、単称項により表現されたものの存在を確認した上で、ここでは、ソクラテス以来の伝統に従い、少なくとも単称項を主語とした被定義項と定義項の同一性が求められていると理解しておこう。(cf.90b35) 事実を「部分的」と形容しているのは、存在の「端的性」との対比における限定であるが、存在を前提にした定義における主語と述語の同一性との対比としても機能すると思われる。主述連関が全的な一性を持つものではなく、部分的な関係であることを含意しているとすれば、事実と何であるかの問いへの応答を区別することができる。

以上の論述から明確に言えることは、アリストテレスが探究には二つのコースがあることを構文上確定していることである。何であるかに先行する探究は事実ではありえず、存在であることを明確にしている。さらに、何故にかという根拠や理由の問いは、それに先行するのは存在の問いではなく、事実の問いであるということである。ここに探究の二つの過程が確立される。これまでの構文上の分析は、アリストテレスが探究項目を四種類に区別しようと努力していることを明らかにしている。

学知を求める探究論においては、彼は、われわれが学知を求めて問うという実践についての、アカデメイアにおいて展開されている二つの探究様式の関係解明に関心をそそぎ、何か、これらの問いに先立ち、探究内容として実体と属性、ものとこと等の独自の哲学的先行理解を彼が、探究論構築にあたって、持っているを読み込んでではない。⁽⁷⁾ 探究項目だけではなく、この探究過程も、通念として明確に言えることであり、問いとして「何故にか」から「はたして～か否か」に問いを進めることはありえないということ、さらには「何であるか」から「あるか」に向かうことはできないことはロギコースつまり形式言論上自明である。現用言語の分析はアリストテレスにとって、単に「概念分析」ということに止まるのではなく、存在の構造を反映しており、

その存在の構造の解明の手がかりとなっているという信念を持っている。⁽⁸⁾このようにロギコースにこれらの問いを明確にし、理解を深めていくことが新しい探究論の課題なのである。

3

彼の探究論の新たな出発は、B2 冒頭の発見知と探究の同数性テーゼの再言及とそれに続く探究の理論枠としての論証言語の導入に凝縮されている。

われわれが探究する事柄と、発見し知る事柄はこれらであり、これだけの数である。しかし、われわれは事実をまたは端的にあるかどうか〔存在〕を探究する時、はたしてそのものの中項はあるのかそれともあらぬのかを探究する。事実または存在を知って、〔つまり〕部分的にということ〔事実〕または端的にということ〔存在〕を知って、今度は何故にか〔理由〕または何であるかを探究する時、その時中項は何であるかを探究する。(89b 36-90a1)

以下、事実から理由への過程を (I) とし、各々事実を (Ia)、理由を (Ib) と表記する。存在から何であるかへの過程を (II) とし、各々存在を (IIa)、何であるかを (IIb) と表記する。そして中項の存在からその何であるかへの過程を (I&II) とし、各々中項の存在を (I&IIa)、その何であるかを (I&IIb) と表記する。

(a) (b)

(I) 事実 (Ia) ⇒ 理由 (Ib)

(II) 存在 (IIa) ⇒ 何であるか (IIb)

(I&II) 中項の存在 (I&IIa) ⇒ 中項の何であるか (I&IIb)

探究と発見は対をなしており、発見知の種類の数と探究の種類数は等しい。B1 冒頭においては彼の探究論は伝統を継承しつつ、同数性テーゼにより探究項目が「学問的に知ること (epistasthai)」(89b23f) の数と同数であるとされたが、B2 冒頭においては「発見して知る (heurontes ismen)」(89b36) 数と同数であるとされている。

同数性テーゼ：探究される事柄は発見して知られる事柄と同数である。

自らの探究論の特徴を提示する B2 において、そこでの「知識」を意味する語は B 1 とは異なり、感覚知から論証知までも含む広い意味での「知る (ismen)」が発見知を表現すべく用いられている。その術語の選択は発見知が持つ多様な知のグレードの故になされている。私は、単に言論の力により探究する弁証術との対比を明確にするために、そしてなによりも、彼の探究論の特徴を最も適切に表現するものとして、彼の探究論を「発見的探究論」と呼ぶことにする。数学の証明等を含め、広い意味での経験的な観察、実験、証明の場が探究の場である。探究という認識経験はそのもとにおいて基礎づけられ、導かれる理論的枠組みを必要とする。アカデメイアの同僚たちは、「分割法」や「何であるかの形式言論上の推論」をその枠組みとし、その実践の場は問答であったが、彼は論証理論を現実世界において発見をもたらし探究のガイドとする。論証の探求過程への組み込みは探究のプロセス (I) (II) が論証言語である中項の探究 (I&II) との同定によって表現されている。このように学知を求める発見的探究論構築の条件を「学知条件」と呼ぶことにする。

学知条件：事実と存在の探究は中項の存在の探究を意味し、理由と何であるかの探究は中項の何であるかの探究を意味する。

発見という事柄は知覚を端初に、また人間の他の認識能力を用いてなされるが、さまざまな把握の程度を有する。B1 で事実の探究があることの「証拠」として「太陽が蝕を蒙ることを発見して、われわれは〔探究を〕やめるからである」(89b27f) と述べるが、B2 冒頭の学知の制約を受けない発見は知覚的なものに止まる事実の把握を意味しているよう。われわれは、一回的な知覚認識を得ただけで、それは何故かを問うことがあるが、学知条件が、そのように問うことを妨げているわけではない。この同定が意味することは、単に、それでは学知を得るにふさわしい、事実や存在の把握とは言えないということである。中項の存在の探究とは、事実や存在の探究において、それらが論証可能なものかどうか問われているのであり、論証可能性の把握は学知獲得のふさわしい位置に在ることの表明である。(cf.93a31-33)

中項という論証言語を導入する学知条件によるこれらの探究の同定は、一般的に何であるかは存在より先に問われ得ないという探究プロセスの先の構文上の、そしてその文法がそこから得られる現実についての形式言論上の制約によるものであり、学知を得るにふさわしい探究態度の表明として行われているのである。実際、彼は探究と発見のプロセスを論証言語へ組み込む作業を後述の B8 で行っている。換言すれば、論証の発見こそ探究の目標となる。アリストテレスはその事態を次のように述べている。

それぞれの学にとっての原理の大半は〔その学に〕固有なものである。それ故に、それぞれの主題に諸原理を提供することは経験の務めである、つまり、例えば、天文学については天文学的经验がその原理を提供するということである。というのも現象が十分に把握された時、天文学上の論証がそうして発見される (heurethēsan..apodeikseis) からである。他のどんな技術や学問についても同様である。(46a17-22)

アリストテレスは知識を求める探究論において、発見ということは排他的に知覚と同一化されることはなく、理想的には普遍の場で成立する事柄だとする。これは、従来の普遍的な定義の形成を求めたソクラテスの探究論の連続線上にある。ただし、普遍の意味は A4 等において、より厳密に規定されていることを注記しておかなければならない。⁽⁹⁾ 次の月面上の蝕の観察事例は、探究の現場における、論証の発見の事例と言える。彼は「例えば蝕について、それがあるかそれともあらぬのかを、知覚しない時にわれわれは探究する」(90a25f)と述べるが、発見は単に今、ここにかかわる個別的な知覚と同一視されることはない。発見は知覚を媒介にしながらも、普遍の把握へ向かう。(90a26-30) もしわれわれが月蝕のさいに、月面上にいれば、暗くなることと地球が太陽と月の間に入ってくることを見ることができようが、その時、地球の遮蔽がある時には常に、そしてそれ故に月蝕が起こるということをして「頭脳明敏」つまり「一瞬のうちに射当てる才知」(89b10)により把握しうるかどうかが問題である。(90a26-30) 彼は「知覚することに基づいて、普遍を知るということもわれわれに生じるであろうからである」(90a28f)と述

べる。つまり何かを事実上知覚することと、その知覚対象を根拠として把握することは異なる。そこには思考が介在している。

もしわれわれが月面上にいたとして、地球が遮蔽するのを観察したとしても、月蝕の根拠を知ったことにはならないであろう。というのも、今、月が蝕を蒙っていることを知覚してはいるが、その理由をまったく知覚してはいないからである。というのも感覚は普遍についてはなかったからである。しかしながら、これをしばしば観察することに基づき、われわれは普遍を狩るということが生じ、論証を持つこともできよう。多くの個々のものに基づき、普遍が明らかとなる。普遍は尊い、根拠を開示するからである。

(87b39-88a6)

根拠とはこのように論証によってのみ把握される事柄である。事実上、地球の遮蔽が月蝕の根拠であるとしても、知覚はそれを根拠として捕えることはできない。「根拠」という語は、アリストテレスの探究論においては、論証を前提にしなければ、語り得ない事柄であることを示している。(cf.94a 20-24)そして論証においては、中項が事物・事象の根拠の位置を占める。かくして、発見的探究論は、そのもとで現実世界において実践される理論的枠組み、規範として論証を持つ。そうすることによってのみ、事物・事象の根拠に従って、学知を獲得することができる。こうして、従来の探究の二つのプロセス (I) (II) は論証という規範の故に包括され、ひとつの学知のひとつの探究過程 (I&II) となる。

かくして、アリストテレスの探究論は発見をなすわれわれの認識能力の多次元性のもとに、個別的な事物・事象の探究を含みうるとともに、理想的には論証の発見をめざすものとして方向づけられている。それが、学知条件の意図である。彼は「従って、あらゆる探究において、中項は存在するか、あるいは中項は何であるかを探究することが帰結する」(90a5f)と述べる。つまり、あらゆる探究において、何か根拠があるかが、つまりそれを中項とした論証ないしは推論の形成が可能かが、実際には同時に問われている。そして、それが論証可能であるとして、何が中項であるのか、即ち何が事物・事象を

そのもとに分節し、必然的なものとして関連づけるかが求められていることになる。(Ia) と (IIa) は (I&IIa) の探究であるとされるが、この同一性は問いの順序をめぐる形式言論上の不可逆性に依存している。というのも、中項が何であるかを問うことは、まず、中項があるかを問い、そしてそれがあるということを何らかの仕方では把握してから初めて提出しうる問いであるからである。事実や存在を把握せずに、中項は何であるかを問うことは形式言論上不可能である。

応答としての発見知の側からすれば、(Ia) と (IIa) の発見知は (Ib) と (IIb) つまり (I&IIb) の発見に至るまでに諸段階がある。B8 において発見の諸段階に対し、分析が試みられるが、存在に関して (1) 「付带的に」把握する段階、それから (2) 「事物・事象そのものの何ものか」を把握する段階、さらに中項と大項の連関が (3) 「無中項」であるものを把握する段階に区別される。(93a 21-36) B8 に関しては後述するが、探究途上のプロセスに関するこの分析は発見の層の豊かさを表わしている。そして (I&IIb) の成功した発見に至らない (Ia) と (IIa) の発見の諸段階、つまり B 8 の (1) (2) の段階が無視されているわけではない。(Ib) と (IIb) つまり (I&IIb) の発見についても同様のことが言える。従来、しばしば (I) と (II) から (I&II) への「還元」⁽¹⁰⁾ が語られてきたが、探究は中項のそれに同定されてはいるが、還元されているわけではない。これらの同定は四つの発見知が論証知となるよう導かれているということである。換言すれば、事実と存在の探究から理由と何であるかの探究への移行の正当性を保証するものは、(I&IIa) が発見された時であり、諸レベルを持つ発見知にそこに収斂する究極目標を与えているのであり、発見の種類の数が四つであること、同数性テーゼにはかわりはない。四つの探究項目に関して学知が求められているのである。事実を学知として捕えるのは、その理由を知ることによってであり、存在を学知として捕えるのはその何であるかを知ることによってである。

単称項で問われる存在の探究において、中項という二項を媒介するものが探究されるという主張が、しばしばアポリアとして提示されてきたが、これは発見の持つ豊かさ、諸グレードを指摘することによって解決することがで

きる。⁽¹¹⁾ 存在は、先述のように、時に「付帯的に」、時に「事物・事象そのものの何か」を知ることにより、何であるかの探究に向かう位置づけが決まる。(93a21-29) 論証は発見的探究の規範としておかれ、根拠を開示する普遍を、つまり中項によって必然的に媒介される大項と小項連関を、頭脳明敏により射当てることが論証形成を通してめざされている。

発見はそこに至るまでの諸グレードのうちに置かれている。実際には発見という認識経験として様々なグレードを許容し、途上にある認識経験をも包摂しうる、何か知を求めて問うということ一般に対応できる探究論が構築されている。これらの問いと応答の枚挙は実際にそういう仕方で問い、そしてそういう仕方で答えるという問いと応答の種類についての慣習の確認からはじめられている。そして、そのプロセスは形式言論上確定される。「AがBであるか」を知らずに「何故にAはBか」を尋ねることはありえない。同様に「Pがあるか」を知らずに「Pが何であるか」を尋ねることはありえない。これら探究項目の提示は、実質的には同じ内容が問われているとしても、問いと応答の形式として相互に排他的であることを、構文論上のまた形式言論上の制約を課し提示している。それ故にバーンズが「これはアリストテレスが誰であれ問おうと思うであろう問いに対するまったく一般的な関心を示しているのではないことを、すなわち彼はもっぱら、彼の考える科学的探究に適切であるあれらの問いにだけ関わっているという想定を確認する」と述べるが、確かに、学知を求める探究論は学知条件故に「科学的」たろうとしているが、それ以前に問うということ一般の形式言論上の制約を確認し、そのもとに科学的たろうとしているのである。⁽¹²⁾ そのことは科学的探究に適切な問いにだけ関わっているわけではないことを示している。そのような限定は、付帯的な発見や個別的な発見をも包摂しうる探究論の持つ豊かさを削いでしまう。このような理解は、問いの設定が、知を求める二つの潮流として、アカデメイアにおける慣用の構文的な整理から始められ、何であれ知を求めて問うという探究論の基礎にある一般的な問うということへの関心を無視している。アリストテレスは探究の言語使用の分析に基づき、科学的探究に向かっている。さらに、このバーンズの主張は彼の還元の主張に直結するが、探究

論が発見的探究論であるということ、とりわけ同数性テーゼが見逃されている。⁽¹³⁾ これらの表現によって問うという一般的にして根源的な営みを、通念に即して四分類しているのである。B1 においては、問いはまだ洗練されずアカデメイアの現用言語に沿ったものであったが、学知条件により B 2 以降において、新たな展開を見せている。

B2 において学知条件はふたつの密接に関連した新たな主張を生みだす。その主張は彼の論証と定義の関係の解明に向かう、それ故に独自の定義論を打ちたてる試金石となる。一つは「根拠は中項であり、すべてにおいてこれ[根拠]が探究されている」(90a6f) ことと、他は「何であるかと何故にかが同じであることは明らかである」(90a14, 90a31f, cf.93a4) である。前者は学知条件の故に、中項によってだけ、或る存在者が根拠の性格を持つことが知られるということである。後者は学知条件の必然的な帰結である。その論拠は更めて、発見知の諸段階の議論に取り組むことにより、明確に B 8 で与えられるが、B 2 においては、実体にも自体的属性や付帯的属性にも何らかの根拠があるなら、それは推論や論証における中項の位置を占めうるものとなるという、事態が指摘されている。彼は「これまたはこれではなく端的な実体」と「端的にではなく自体的属性ないし付帯的属性のうちのなにものか」双方の「存在の根拠」は中項であるとしている。(90a9-11) これらはふたつのコースの探究対象の相違を示したもので、(IIa) 端的な存在と (Ia) 部分的な事実の探究の相違に対応する。どちらのコースを辿っても、双方の存在の根拠は論証により同定されるものであるということ、そしてそれは中項の発見によりなされるということが「何であるかと何故にかが同じである」ことの論拠とされる。⁽¹⁴⁾

さらに、探究の現場において「何であるか」と「何故にか」に対する発見知は同じ説明言表を提示しているということが、天文学や音楽の事例により例証されている。

月蝕は何であるか。地球の遮弊による月からの光の消失である。
何故に月蝕はあるのか。或るいは[先の表現区分に従えば]何故に月は蝕を蒙るのか。地球が遮弊することにより、光が消失する

ことの故にである。調和音とは何であるか。高音と低音における数の比である。何故に高音は低音と調和するのか。高音と低音が数の比を持つことによってである。はたして高音と低音は調和することがあるのか。はたして数におけるそれらの比があるのか。あるということを把握して、それではその比は何であるのか [が問われる]。(90a15-23)

これはピュタゴラスやプラトンが、明確な定義論をもたずにも、定義の要素として数やアイデアという根拠を提示していたことに関連する。「何であるか」という問いにおいても、また「何故にか」という問いにおいても、その応答として実質的には根拠が示されているという、問いと応答の現実が、この新しい主張の論拠となっている。この事例から知られる一つの重要なことは、(Ib) と (IIb) を知ることは (I&IIb) つまり中項の何であるかを知ることであるとされる時、単に根拠が何かを提示するだけではなく、根拠により引き起こされる事物・事象をも、その応答は含むということである。中項は常に大項小項連関を媒介するものであるからである。このように、われわれが「何であるか」や「何故にか」を問い、その応答は、論証という理論的枠組みのもとにおける発見として同一内容であるという探究の現場の事実が、探究論構築の手がかりを提供している。

4

このように論証という理論的枠組みのもとに発見的探究が遂行されるが、学知を求める探究は中項の発見つまり論証の発見という規範のもとで遂行されることが明らかとなった。しかし、論証理論のもとに定義論を構築するというアリストテレスの構想は、アカデメイアの時代に至るまでの何であるかの探究の伝統のなかで、独自のものであり、そこには解決すべきさまざまな問題が含まれよう。彼は自らそれを自覚し、B3以降次の三つの問いを立て、従来の探究プランのゴールである定義の獲得をめぐる諸問題に取り組む。彼は B3 で彼の構想を実現するために解決すべき一般的な問いを立て、B4-6 に

において競合理論を紹介したその問題点を指摘する。そして B7 において、B3 の一つの課題に対する解決を試みるが、それに伴うアポリアを提示し、最後に B3-7 の議論を纏める。

論証理論の枠のなかでの定義論というアリストテレスの探究プランは次の問題を解決しなければならない。

かくして、すべて探究されるものは中項の探究であること明らかである。しかし、(A)いかに何であるかは証明されるのか、また (B) [何であるかの] 導出の方法は何であるのか、そして (C) 定義とは何でありそして何についてあるのか、これらについて最初にアポリアを挙示し、語ろう。(90a35-38)

すべての探究が論証言語の下にある中項の探究であるとして、(A)いかに探究のゴールである「何であるか」は証明されるのか。発見的探究の下にある何であるかの (B) 導出の方法は定義であるのか、それとも論証であるのか。(cf.96a20f) 従来の何であるかを開示するとされる (C) 定義は、実際、いかなるものであり、いかなるものについてあるのかが問われる。端的に言って、ここでは定義と論証の関係が問われている。そこでの中心的な課題は、論証がいかなる定義論の理解にも依存することなく、その役割を遂行するということを保証しうるものでなければならないということである。さもなくば、或る定義論のもとに、論証をその理論枠とした発見的探究をなし、そこから論証に基づいた定義論を構築することになるとすれば、定義をめぐる循環か矛盾かの誤謬を犯すことになるであろうからである。

アリストテレスは B3-7 において、彼の探究論の構想に対する反論とアポリアを自ら提示している。B8 以降、特に B8-10 において定義と論証をめぐる理論的課題に対する解決案として、新たな探究論を提示し、アポリアを解決していく。D. チャールズは『アリストテレスにおける意味と本質』において、これらの章の解釈として詳しい説得的な議論を展開している。それを前提にしたうえで私はチャールズが取り上げなかった視点から、B4-7 の新たな解釈を試みたい。私は本質 TEE の理解においてチャールズと見解を異にする。彼は「本質は種のすべての派生的な必然的属性の単一の根拠である」

と述べる。また彼は「本質」を「単一の因果論上基本的な特徴」と形容し、「本質」により種の諸特徴を統一する因果論上基本的な特徴のことを理解している。⁽¹⁵⁾ 彼はこのようにただちに因果論的文脈のなかで本質を理解する。私はその手前で本質 TEE は形式言論上「いかに語るべきか」(1030a27)という視点から、その自体的同一性としての存在が要求されるものと解し、その次の段階において論証理論さらには、より本格的には質料形相論という因果論的文脈においてその具体的な実質の探究を導く役割を持つと考えている。私は本質は形式言論上語られるものであり、そこでの本質の特徴づけ例えば一なる全体が、因果論的に分節されるさいにそれ自体としてある形相と同一視され、質料を統一する役割を担うと解している。この立場からテキストに取り組む時、チャールズとは異なるアクセントにおいて定義と論証の関係に光をあてることが可能になると思われる。

私の関心は、この議論の流れにおける本質 TEE についてのアリストテレスの取り扱いである。アカデメイアの競合理論を扱う B4-6 において、この語が頻出し、B8 において、それまでに提示されたアポリアを踏まえた新たな探究論の展開においては、この語がそこに取り込まれている。他方、B10 の定義の数と種類の提示においては、定義の対象として明示的に述べられることなく、B11 において、本質 TEE が四原因のひとつとして、再び明示的に登場する。すでに提示した私の本質 TEE についての理解が正しければ、それはソクラテスが求めたものであり、定義によって明らかにされる事物・事象それ自体、あるいは一なる全体のことであった。アカデメイアにおける何であるかの推論や分割法による定義構築の企ては、すべてソクラテスが求めていた、あるいは彼は明確な手法をもっていなかったので求めようとしていたと言ふべきであるかもしれないが、事物・事象それ自体の解明であった。そのことから、アリストテレスが競合理論の提示において、その語が頻出されることはよく理解される。この理解のもとに、本質 TEE が彼の探究論のなかでどのように取り扱われているかを、論証と定義の関係の解明のなかで、明らかにしたい。

定義と論証をめぐる B3 における問いは次のものである。

(1a) 定義と論証により知られる対象は同一であり、(1b) 同一の視点に即して知られるのか。(2) 定義があるものすべてについて論証はあるのか。(3) たとえ、同じすべてのものについてでないにしても、或る同じものについてはあるのか。(90b1-3, cf.90b19f, 90b28f)

そして、これらの問いに対する、一応の結論は次のものである。(問いの記号に対応する応答を同じ記号によって示す)。

(2) (3) 定義があるものすべてについて論証があるのでも、論証があるものすべてについて定義があるのでもないということ、総じて、(1a)いかなる同じものについても双方を持つことはありえないということは明らかである。それ故に、(1b)定義と論証は同じものでもないし、一方が他方に含まれるものでもないことは明らかである。というのも、そのさいには[双方の]下に置かれた主題も同様な関係にあったであろうからである。(91a7-11)

このように、論証と定義の関係をめぐる上の問いに対する応答はすべて否定的なものである。

まず問い(1a)に対しては、一方、定義の対象は「何であるか」であり、それは全称肯定であるのに対し、論証がその基礎論理とする三段論法には、第二、三格のみならず、全称肯定を持つ第一格においても特称や否定の結論となるものがある、と答えられる。(90b3-7) 他方、(2) (3) についても否定的に答えられる。(90b7-17) 論証を持つことは論証可能なものについて学知を持つことである。論証可能なもの、例えば三角形が二直角を持つことについて学知が成立するが、これは三角形の定義ではない。そして、この論証を持たずにも、例えば、三角形は三本の直線により囲まれた図形であるという、定義に即して、学知を持つことも可能であろう。経験上、自体的属性や付帯的属性について定義により認識を持ったことはなく、他方、定義が実体を認識させるものであるなら、実体は論証可能なものではないことが帰結する。

もし、一切が否定的であり、論証と定義が無関係であるとすれば、B1-2 における探究プランは実現しない。彼がこれらの見解にコミットしていない可

能性を残すものとして、「見える」という表現を用いていることに言及すべきである。両者の非関連性の一つの論拠は次のように論じられている。

定義は何であるかつまり実体についてあるが、論証はすべて何であるかを仮定しそして容認しているように見える (phainontai)。例えば、算術の論証は「一が何であるか」をそして「奇が何であるか」を、また他のものをも同様に容認している。尚、すべての論証は何かについて何かを、例えば、それがあるとかあらぬとかを、提示する。しかし、定義においてはいかなるものも他のものについて述語づけられることがない。例えば、動物は二本足について、またこれが動物についても述語づけられることがない。
(90b30-36)

この論述において注意すべきは、「論証はすべて何であるかを仮定しそして容認しているように見える」という仕方、A巻で展開される公理論的演繹体系において用いられる「何であるか」をそのまま、探究論の文脈に持ち込んでいるが、「何であるか」は論証との関連で常に、そのような仕方、仮定されねばならないかは明らかではない。そのために「見える phainontai」という表現で、自らそれにコミットすることを留保していると思われる。ともあれ、この定義と論証の非関連性の議論から、「存在と何であるかを証明することは別である」という重要な主張が導かれる。(90b38) これを存在と何であるかという世界の側での分離に基づいた、論証と定義の「非関連性テーゼ」と呼ぶことにする。⁽¹⁶⁾ 相互に何ら関連がなければ、B1-2で提示された探究論のプランは実現されないことになる。

非関連性テーゼは、例えば、二直角が存在することは、それが三角形に帰属することを論証することにより知られるが、三本の直線により囲まれた図形が三角形であることは、それが正しい三角形の定義項であるとして、ただ定義によってのみ同一のものであると知られるということである。他方、三本の直線により囲まれた図形が存在することは、三角形に帰属するということを論証することができないために、論証によって明らかにすることができないということも、この主張には含まれている。存在は何か他のものに帰

属するという仕方ではしか論証の対象になりえないと言われているからである。しかも、定義によって同一のものであると知られるものは、それが存在するということを定義によっては明らかにすることはできないということである。このように、論証と定義の機能をめぐる、この非関連性、独立性のこのような主張は、世界の側で存在と何であるかは独立しているないし切断されたものであるという解釈に依存している。「何であるか」は論証においては仮定という仕方ではしか関わりえないのであろうか。他方、定義は何ら存在に関わらないのであろうか。定義は存在に関わらず、論証は何であるかに関わらないという非関連性テーゼを克服することはできるのであろうか。何かが存在することとそれが何であるかを提示することが連続的なものであるという理解は残されていないのであろうか。B1-2 で示された彼の探究論のプランを遂行するためには、アリストテレスは存在を確立する論証を通じて、定義が得られるというそのプロセスを明確にしなければならない。

B4-6 でアカデメイアにおける定義と広い意味での証明の関係をめぐるいくつかの企てが紹介され、その問題点が指摘されている。彼の探究論は同僚たちが抱えている難点を乗り越えるものでなければならない。B4 において、あらためて、「はたして推論と論証は何であるかについてあるのであろうか、それとも、今の議論が示唆したように、あらぬのであろうか」が問い直され、同僚たちの取り組みが紹介される。(91a12-14) ここで重要なことは、「何であるか」によって「何であるか即ち本質 TEE」(91a25) という仕方で限定され、「本質 TEE」が理解されていることである。アカデメイアの伝統として、ソクラテスが定義において求めていたものは事物・事象それ自身のこと、その一なる全体のことであったからである。本質は『トピカ』におけるプレディカビリヤの提示において術語化されたものであるが、この章は自らの術語づけのもとにクセノクラテスに帰せられる本質の推論を解釈しその可能性を吟味している。本質は「固有性」と「何であるかにおいて述語づけられるもの」により開示されるが、これら双方の条件を満たさなければならない。彼は、ある事物の本質を結論として導出する推論は、その前提にもう一つの本質の記述が、ここでは「証明しなければならないことを容認している」(91a32)

という仕方で、要求されることを明らかにしている。⁽¹⁷⁾ 或る対象に本質があるとして、その説明言表が複数あることを認めることができるのか、さらに、たとえそれがあるにしても、本質は事物にとって一つであるなら、二つの記述は同一のものを指示するはずであり、証明すべきものをすでに前提に取り込んでしまっている。これは本質の推論が論点先取を犯しており、本質を結論とする論証が成立しないことを明らかにしている。彼はクセノクラテスに帰せられる本質の推論の試みを論点先取の誤謬を犯しているものとする。

或る人々は「靈魂とは何であるか」を……、换位することにより、証明を企てているが、それは論点を先取している。例えば、誰かが[小前提] 靈魂とは自らが自己自身において生きることの根拠であると要請し、他方、[大前提] 自らが自己自身において生きることの根拠とは自らが自己自身を動かす数であると要請する場合の如きがそうである。というのも、[結論] 靈魂はまさに自らが自己自身を動かす数であるということを、[三項が] 同一のものであるという仕方で、[予め] 要求せざるをえないからである。(91a 35-91b1)

このようにソクラテスが求めた事物・事象それ自体としての本質 TEE を結論として推論する試みは成立しないことが明らかにされる。

B5 においては、アカデメイアの公用の定義論である分割法が批判される。まず第一に「分割による道」(91b12) が基本的に問答のなかで遂行されるということそれ自体が批判される。推論においては「結論は問うべきでも、承認することによって成立すべきものでもなく」(91b16), 或る前提のもとに回答者が何も言わなくとも「必然的に生じる」(91b14, b17) ものでなければならない。分割法においては結論が推論されているのではなく「分割者は結論を容認している」。(91b21) 従って、アカデメイアの問答形式のもとにある分割法は推論ではないとされる。彼は「分割に基づき定義する者は、推論を語ってはいない」と明言する。(91b35f, cf.91b12, b23) 第二に、分割法は「何であるかさらには本質 TEE を明らかにすること」ができないと批判される。(91b26) たとえ、すべての「人間」について「陸生の動物」があることを分

割により明らかにされたとしても、それを人間の何であるかないし本質 TEE として明らかにするそのような機能を分割法は備えていない。分割法の手法によっては、人間の実体を把握すべく何を付加し、除去すべきか、さらには何を見過ごしているかを明らかにすることはできない。(91b26f) 定義を確立する方法として、分割法が提示する項連関に対し、常に「何故に」と問い直すことができる。なぜなら、「中項抜き結論において」それを問うことができるように、分割法は何かを中項として確立することができないからである。アリストテレスは分割法による定義の確立は推論によるものでないとする。

「人間とは何であるか」。「それは可死的な、有足の、二本足の、無翅の動物である」。それぞれの「種差の」付加ごとに「何故に」と問い、「何故なら」と答えるであろう。……しかし、このような説明の全体は定義ではない。その結果、たとえそれが分割により論証されたにしても、ここでは定義は推論とはならない。(91b 39-92a5)

このように B 3 における非関連性テーゼを分割法は自己申告として乗り越えているとするが、その欠陥が指摘されている。探究論構築をめざすこの文脈における分割法批判は、それが推論ではないことと、その手続き全体が定義とならないこと、さらにたとえ現実すべて定義の要素を言い当てたにしても、中項を中項として把握する機能を備えてはいないこと、それ故に本質 TEE を本質 TEE として開示できないというものである。

続いて、B6 において、定義と論証の非関連性テーゼを克服するさらなる試みが吟味される。この試みも『トピカ』の術語により提示されており、アリストテレス自身により整理された彼の同僚の試みであろう。ここでも「本質 TEE」の説明言表は、B4 におけると同様、固有なものとは何であるかにおいてあるものの双方の条件を満たすものから構成されることが確認されている。(92a7f)そして、ここでの試みは「仮定に基づいて、実体という意味での何であるかを論証すること」の可能性を探る企てである。(92a6-9)ここで「実体という意味での何であるか」とは一なる全体という存在者である本質としての実体のことである。つまり本質を仮定し、そこから本質を論証すること

ができるかが問われている。これは定義としての説明言表に他ならず、定義を仮定して、そこから定義を論証することができるのか、「それとも、再び[B4においてと同様に]ここでも本質 TEE を容認したのであろうか」が問われる。(92a6-10) もし、できるとすれば非関連性テーゼは克服されることになる。ここでも B 4 同様、何であれ「証明は中項を通じてなされねばならないから」(92a10)、やはり事物の本質を容認し、そこからその本質の他の説明言表を証明することになり、論点先取の誤謬を犯すことになることが指摘される。

ちょうど推論において、推論されるということが何であるかを推論において容認することがないように（というのも、推論がそれに基づく前提は、常に全称か特称かのいずれかだからである）、そのように本質 TEE[の説明言表]も推論のうちにあってはならず、むしろ、それは「前提に」指定されるものどもから分離されていなければならない。そして推論が成立しているのかそれともいないのかに異論を立てるひとに対しては、「[成立している。]これがそもそも推論というものだ」と対応し、そして本質 TEE は推論されない異論を立てるひとに対しては、「その通り [推論されない]。というのも、われわれはそれが本質 TEE であると指定したからである」と対応すべきである。かくして、推論とは何であるか或るいは本質 TEE とは何であるか「を容認すること」なしにも、何かが推論されるということは必然的である。(92a11-19)

この議論は一つの規範として本質を開示する定義は推論のうちに指定されてはならないということを明らかにしている。実体は論証の対象たりえないこと、また推論の定義や本質の定義は実際の推論には用いられないことが明言されている。

このような事情であるとすれば、アカデメイアにおいて流布していた次の論証は成立しないことになる。何か反対なものがあるものどもにおいては、反対なものであることは、その反対なものにとって反対なものであることである、そして善は悪にとって反対であり、悪であることは可分割であること

であり、不可分割なものは可分割なものに反対であるということから、善であることは不可分割であることが結論づけられる。(92a20-24) この推論に関して、「ここでもまた本質 TEE を容認して、証明している。本質 TEE を証明すべく、それを容認している」と言われている。(92a24f)

B4-6 における非関連性テーゼを克服する試みは成功せず、新たなアポリアを生みだすことを受けて、B7 においてアリストテレスは、あらためて B3 冒頭の問い、「それでは、一体定義する者はどのように実体或るいは何であるかを証明するのであろうか」を問う。(92a34f) ここで、定義する者は論証する者と帰納する者と対比され、また定義は感覚と直示とも対比されている。論証者は同意されたことに基づき、また帰納者は個々のものの自明性に基づき、「何であるかではなく、あるとかあらぬを証明する」。(92a38f) 定義者にはどのような方法が残されているのかが、あらためて問われている。アリストテレスはここで「何であるか」について語りうる形式言論上の状況を考察する。彼は次のようにロギコースに論じる。

誰であれ、人間や他の何であれ、それが何であるかを知っている者は、それが存在することを知っていなければならない。なぜなら、誰もあらぬものについて、それが何であるかを知ることはなく、「山羊鹿」と言う時、一方、その説明言表や名前が何を意味しているかを知るが、他方、山羊鹿が何であるかを知ることはできないからである。(92b4-8)

ここで、非存在について新たに言及され、探究の過程がロギコースに明らかにされている。「山羊鹿」のような架空の存在についても、その名前が何を意味しているかを知ることはできる。しかし、「何であるか」は存在することを知っているものにしか語ることはできない。こうして、名前が何を意味しているかと名前が指示するものが何であるかは区別される。なぜ、何であるかは存在を前提にするのであろうか。ロギコースに言えば、「Xがある」ということを知って、初めて「Xは何であるか」を適切に問いうるという問いと応答の順序をめぐる言論上の事情によるが、ここでは彼は再び非関連性テーゼに訴える。「もし定義する者は何であるかおよび存在を証明することができ

るならば、同じ論拠により、どのように証明するのであろうか。というのも、定義は一つのことを、そして論証もまた一つのことを明らかにするからである。しかし、人間とは何であるかと人間が存在することは別である。」(92b 8-11)

アリストテレスは、続いて、この非関連性テーゼから新たな主張を、具体的な事例を提示し導く。幾何学者はまず三角形が何を意味するかを容認し、論証を通じてそれが存在することを明らかにする。「それでは、定義する者は何を証明するのであろうか。三角形が何であるか以外にあるのであろうか。かくして、ひとは定義により何であるかを知りながら、存在するかどうかを知らないということになろう。しかし、それは不可能である。」(92b17f) この箇所論じられている定義する者は存在の把握を前提にしていることを、「存在先行性テーゼ」と呼ぶことにする。しかし、ここに「定義の今日の諸様式」(92b19) にとっては一つのアポリアが待ち受けている。つまり、従来の定義論に即す限り、次の問題に直面する。

定義する者は「何かが」存在することを証明しないことは明らかである。即ち、「次のように問われようからである。」「中心から等しいものが何か存在するにしても、定義されるものは何故に存在するのか。」「また、何故にこれは円であるのか。というのも、そのものが「山銅」の定義でもありえるであろうからである。というのも、定義項は語られたものが存在可能であることを付け加えて明らかにすることも、さらには定義がそれであるところのものが存在することを主張するということをも付け加えて明らかにすることもなく、常に「何故に」と語ることができるからである。(92b19-25)

ここではふたつのアポリアが提示されている。まず、一つの説明言表が得られそれが存在するとしても、説明言表がその説明言表であるところのものが存在することを定義は明らかにできない。さらに、一つの説明言表例えば「中心から等しいもの」が「円」の定義であると保証するものは何であるのか。それは「山銅」の定義でないということを何が保証するのか。こ

れらは従来の定義論では明らかにされなかった問題であり、アリストテレスが非関連性テーゼを克服することによって、同時にクリアすべき課題である。これらは「定義論の二つのアポリア」と呼ぶことにする。

定義論の二つのアポリアを受けて、彼は、続いて、少なくとも定義について確実に語れることを確保する。定義は何であるかの説明言表か或るいは名前が何を意味するかの説明言表であるとし、そして前者でなければ、定義は名前と同じものを意味する説明言表となろう。しかし、それは「不合理なこと」である。(92b26-28) このような定義の解釈のもとでは、まず、定義は実体でないもの、そして非存在者についてもあることになるからである。さらに、どんな説明言表についても名前をつけることができるので、われわれは皆定義項を語ることになるであらうからである。そこでは、『イリアス』の全文章が定義項にもなりうるであろう。第三に、論証と定義の無関係性が保持されるために、いかなる論証もこの名前がこれを明らかにするということを論証することはないであらうし、それ故に名前が意味するものの説明言表である定義もこれを加えて明らかにすることはないであらうからである。(92b28-34) この議論から明らかなことは、定義を名前が意味するものの説明言表であるとするものの問題は明らかであり、従来の定義の理解と抵触するばかりではなく、論証との関連づけも不可能となる。

B3-7 の以上の議論の結論は次のものである。(B3 の問題の番号に対応した番号をそれぞれの応答に付す)。

かくして、これらのことから、(1b) 定義と推論は同じものであるとも、また (1a) (2) (3) 推論と定義が同じものについてであるとも思えない。これらに加え、(C) 定義は何も論証することも、また証明することもなく、(A) (B) 何であるかは定義によっても論証によっても知ることはできないように思える。(92b35-38)

この結論は B3 で提出された (A) (B) (C) および (1a) (1b) (2) (3) の課題ないしアポリアに対する応答であり、すべて否定的な結論である。換言すれば、ソクラテス以来の探究対象である本質 TEE を意味する「何であるか」は、従来のいかなる方法によっても把握されないということが、この否

定的な結論に含まれている。しかしながら、彼の探究論構築に寄与する積極的な議論も B3-7 においては展開されている。もし定義が、例えば幾何学者が論証の前に対象の何であるかを仮定するさいの説明言表であり、また名前が意味するものの説明言表であるとするなら、不合理な結果になることが明らかである。他方、本質の推論や分割法という競合理論の問題点も明らかにされている。前者は論点先取の誤謬を犯すし、後者は推論ではなく、たとえ本質を事実上言い当てたとしても、それを本質として確定する手法を持っていないことが明らかにされた。これらの議論を踏まえアリストテレスは B8 以降新たに探究論構築に向かう。

5

B8 冒頭において、彼は解決すべき問題を提示し、新たな出発を告げる。

(D) これらの議論のうちの何が正しく、また何が正しくなく語られたかを、そして (E) 定義とは何であるのか、また (F) はたして何であるかについては一体論証と定義はあるのか、それともいかなる仕方でもあらぬのかを、あらためて、検討しなければならない。(93a1-3)

彼は B8-10 において、これらの問いについての応答をなし、何であるかの把握について、論証と定義が積極的な役割を果たすことを明らかにしていく。

最初に、アリストテレスは B2 で探究論のプランの提示のさいに言及し、これまでの議論に新しい展開の鍵を握ると思われる一つの命題を再び取り上げる。

既に述べたように、[P]；[事物・事象Xの] 何であるかを知ることと [Xの] 存在の根拠を知るとは同一のことであるので、([Q]) …… [P']；その理由は、何か根拠 [Y] が存在し、そしてこれは (α) [Yがその根拠であるXと] 同じものであるか、それとも (β) 他のものであるかどうかであり、そしてもし根拠 [Y] が他のものなら、それ [X] は論証可能なものか、不可論証

なもののどちらかである、ということである。……[R]；その時、もし根拠 [Y] が他のものでありかつ [Xが] 論証可能なものであるなら、[S]；必然的に根拠 [Y] は中項でありそして第一格において証明される。というのも、証明されるものは、普遍的でありかつ肯定的なものであるからである。(93a3-9)

[P]において、アリストテレスはB 2における彼の探究論の出発点を再提示する。(cf.90a31f, 90a15)ただし、この節においては、[P]は理由句の前件として「～ので」により導入されている。解釈上争われていることは、この帰結として [Q] に、ピロポノスやバーンズのように「或る仕方で (pōs) 何であるかの論証が存在する」(93a2)を各々若干の変更を加えて補うのか(cf.93a2f, 94a2, 94a14f), それともザバレラのように「私が推測するに、何も付加されるべきではなく、アリストテレスの文は完全である」とするのかである。ザバレラは[R]と[S]の「語の連続的全体」が[P]の帰結であるとする。ピロポノス等の解釈によれば、[P]と[P']が[Q]の理由を述べるのに対し、ザバレラは[P']が[P]に対する理由を与えていると解する立場になり、重要な差異がでてくる。ザバレラは「そしてその理由は、事物の何らかの根拠が存在しなければならないからということである」と述べ[P']が[P]の理由を述べているとするが、この見解が妥当であれば、[R]と[S]がすでに[Q]を含意することになるので、[Q]を補う必要はなくなる。⁽¹⁸⁾

問い(F)すなわち、何であるかには論証か定義はあるのかという重要な課題に肯定的に答えるためには、[P]が重要な鍵を握る。これを説得的に打ち立てうるなら、B4-7における競合理論に対して、明確な代替案を提供することができる。何であるかと存在の根拠の同一性の理由として、事物・事象には何か根拠があるという主張は、何であるかとは存在の根拠のことであるという、何であるかを因果論的文脈において理解するという主張である。これはすでにB1-2においても論じられていたことである。そこでは、「何であるか」と「何故にか」という二つの緊張関係にある問いに対して、天文学と音楽における具体的な事例を示すことによって、二つの問いには実質的に同

一内容の答えが与えられることが確認されていた。これは〔P〕の一つの具体的な証拠である。さらに、二つの緊張関係にある探究過程の学知条件による統一的把握の提示において、すでに言及されていたものである。すべての探究は学知条件により (I&IIa) 「中項は存在するのか」か (I&IIb) 「中項は何であるのか」に同定されていた。探究理論のなかでは、或る存在者を根拠として語ることができるのは、それが中項として論証言語のなかで処理されるかぎりにおいてであった。かくして、〔P'〕「何か根拠が存在し……」という一文は論証理論の枠のなかで探究が進められていることを示し、根拠がある以上、知識をもたらすという観点において厳密な論証から緩い推論にいたるまで、推論ないし論証の形成の可能性を承認している。学知条件の下における探究論の構想においては、(IIb) 何であるかを知ることと (Ib) 何故にかなしい存在の根拠を知ことは同一なのである。根拠があり、それが〔R〕事物・事象とは異なり論証可能である場合、〔S〕「根拠は中項でありそして第一格において証明されること必然である。」(93a7f) かくして、何であるかは根拠として中項の位置を占め、論証に組み込まれうる。これが (F) に対する応答である。

何であるかの論証に対する組み込みの一つの方法は「今〔B 4 において〕吟味された、何であるかが他の何であるかを通じて証明される様式」である。(93a9f) それは「同じ事物・事象にとってその本質 TEE [の説明言表] のうちの一方は証明し、他方は証明しない」ものであり、これが論証でないことは先に示された。彼はこの様式を「何であるかの形式言論上の推論」と呼ぶ。ここで推論が「形式言論上 (logikos)」のものであるとは、形式上推論としては成立しているが、論点先取を犯しているので論証とはなりえない、そのような証明のことである。またこの語用の背後には、アカデメイアにおける探究方法が弁証術であり、彼等の探究がその枠組みのなかでなされたことが、この術語を選択させている。

何であるかを本質 TEE として理解する限り、何であるかは二つの項のあいだの自体的同一性を意味し、それは論証に組み込むことができない。そこで同一性命題を避けた推論の形成が、何であるかの論証形成の一つの大きな

条件となる。さらに、そこから「定義論の二つのアポリア」をクリアする定義論が構築されねばならない。確実に言えることは、アリストテレスは何であるかを因果論的文脈において捕えていることである。そうすることにより、B3-7において提示された諸問題を解決すべく B8 において「再び、初めから語りなおし、どのような様式で〔論証が〕ありうるかを述べることにしよう」と新たに取り組んでいる。(93a15f)

アリストテレスはあらためてロギコースに発見的探究の過程を確認する。しかし、ここで B1-2 と異なることは、本質 TEE が何であるかとして組み込まれていることである。

われわれは事実を把握して、理由を探究する。時にはそれらは同時に明らかになることもあるが、少なくとも事実より先に理由を知ることはできない。ちょうどそのように、存在〔の把握〕なしに、本質 TEE を知ることはできないことは明らかである。というのも、存在するかどうかを知らずに、何であるかを知ることは不可能だからである。(93a16-20)

現用言語の規範性からして、順序として事実の把握よりも先に理由を知ることがありえないように、ただそれらが同時であってもかまわないが、存在よりも本質 TEE を先に知ることはできない。ここで本質 TEE に言及されているのは、B4-6 の議論を介してアカデメイアにおける探究目標を自らのものとなしえたからである。彼は「何であるか」によって、少なくとも、一方では「存在の根拠」を理解し、他方では事物・事象それ自体としての「本質 TEE」を理解している。

続いて、何であるかの形式言論上の推論にかわる、何であるかの論証の手法を構築すべく、発見的探究の諸段階に対し、分析が試みられる。存在に關して (1)「付帶的」に把握する段階、それから (2)「事物・事象そのものの何ものか」を把握する段階、さらに中項と大項の連関が (3)「無中項」であるものを把握する段階に区別される。(93a21-36) (1) においては、「われわれはあるということを何ら知っていない」(93a26) とされる。(2) においては、例えば月蝕に関して「或る光の欠如」という把握を持つものであるが、

中項として「満月の夜に、何も妨げるもの (eg. 雲) がないのに影を作りえないこと」(93a37f) という発見を指定する、そのような把握であり、そこでは「月が蝕を蒙ることは明らかであるが、その理由はまだ明らかでない」(93b2) 段階とされる。つまり、月蝕の論証可能性は発見されてはいるが、まだ無中項の命題による理由を捕えてはいない。ところで、この「事物・事象そのものの何ものか」という表現における「事物・事象そのもの」とは本質 TEE のことであった。X の本質 TEE は「[X の] 何であるかにおけるものどもだけ」がその X にとって「固有」となっているもののことであった。(92a7f, 91a15ff) つまり事物・事象それ自体のことであり、弁証術においてロギコースに展開された概念である。その実質はピュシコースに世界から具体的に探究されるものである。この月蝕の事例の場合、月蝕そのものの「何ものか」として「或る光の欠如」がピュシコースに探索されたのである。「或る」はプレースホルダーとしてさらに探索される余地を表現している。本質 TEE を探究する途上における、何であるかの一要素を発見した状況がこの (2) の段階である。

(3) は「地球の遮蔽」を中項として「蝕」を大項とする連関を把握している状態であり、その時には「われわれは事実と理由を同時に知っている」(93a35f) 段階であるとされる。この段階において、中項の何であるかの把握により、適切な論証が形成され、事物・事象の単に「事実」と「存在」だけではなく、「理由」と「何であるか」についても学知がえられていると言うことができる。

この発見の諸段階が論証の形成の諸段階でもあるが、論証知としての学知は (3) の中項と大項が無中項の連関であることを把握する時、得られる。ここで重要なことは論証形成の項の選択方法である。月蝕に関しては、小項が「月」、大項が「蝕」そして中項が「地球の遮蔽」である。(93a30) これは (3) の中項と大項の連関が無中項であるとされているものである。ここでは「月蝕は光の消失である」(93a23) という類の根拠に対する言及を留保し事象だけを記述する部分的定義も結論として採用されてはいない。雷に関しては、他の無中項の連関形成の可能性を残した事例であるが、その項の選択方法についても同様である。(93b12f) 小項が「雲」、大項が「雷」または「音響」そ

して中項が「火の消失」である。ここでも「雷は雲間の音響である」(93a22f)という類の事象を記述する部分的定義は結論にならない。著しいことは大項が「雷」と「音響」の間で代替されうることである。これはしばしば指摘されるように、アリストテレスの「不注意」ではなく、B7において提示された定義の二つのアポリアの一つである被定義項と定義項の関連性を明らかにするものである。⁽¹⁹⁾ B7においては「中心から等しいもの」がなぜ「円」の定義であり、「山銅」の定義ではないのかが問われていた。結論が「音響が雲に属する」とし、「雷」と「音響」が代替可能であるとするならば、「雷が雲に属する」も結論となりえる。そしてこれは「雷」の定義ではない。「雷」の定義が「雲間で火が消されることによって生じる音響」(94a5)であったとして、この定義項に現われる「音響」の故に、これが「山銅」のではなく「雷」の定義であることが明らかとなる。定義項と被定義項の代替により、このアポリアは解決される。これを「代替原理」と呼ぶことにする。⁽²⁰⁾ さらにもう一つのアポリアに対しても、この代替原理を適用した論証により、雷が存在することが確立されている。定義はその存在を確立しないが、この論証を通じて存在するものにのみなりたつ定義形成に向かうことができる。

さらなる新しい定義論の課題は、分割法によっては定義項の諸要素を一なるものにするものを、それとして特定できないというものであった。B8におけるこの問題に対する応答は中項が大項と小項の連関を根拠づけることによって、定義項の諸要素は一なるものになるというものである。

このようにアリストテレスが好む成功した論証の項の選択においては、何であるかの探究対象の定義ないしその部分が避けられ、さらに中項により無中項の連関を形成し結論を必然的な要素とするものが選出されている。これは何であるかを何であるかを通じて証明する「何であるかの形式言論上の推論」の回避であると言える。

今や、B8の結論部の次の文を正しく理解することができる。

かくして、①いかに何であるかが容認され、また知られるものとなるかということ、従って、一方②何であるかの推論も論証も成立しないが、しかし③推論を通じてまた論証を通じて、何である

かは明らかにされるということが語られた。(93b15-18)

①については B4-6 において論じられ、「本質 TEE という意味での何であるか」は「何であるかの形式言論上の推論」において論証されずに、容認されることが明らかにされた。②は B3-7 における非関連性テーゼから導出されたものである。競合理論の分割法は推論としての成立条件を満たすこともできない。さらにはクセノクラテスの推論や仮定に基づく推論は論点先取を犯し論証の条件を満たしていない。③は B8 における新しい試みの結論である。先のような事物・事象の項連関への分節により、中項は根拠としての何であるかであり、それが推論さらには理想的には論証のなかに取り込まれ、小項一大項連関としての結論を媒介するものとして機能する。この推論または論証の形成を通して、何であるかは明らかにされる。

6

これまでのアリストテレスの議論は「何であるか」が何であるかを特定することをせず、伝統的な用法を踏襲してきた。しかし、B3 の (C) つまり定義は何でありまた何についてあるのかという問いに対し、その再言及と言える B8 冒頭の (E) に対して、本格的には B10 において答えられるが、ここで一応の応答ができよう。定義が開示するとされる「何であるか」は多義的であり、アリストテレスはそれにより「存在の根拠」を、また「事物・事象そのもの」としての「本質 TEE」を、さらには「事物・事象そのものの何ものか」としての「何であるかのうちにあるもの」を表現している。「何であるかの形式言論上の推論」が何であるかを通じて何であるかを証明する試みであるとすれば、これら三つの何であるかのいずれも理想的な推論の結論に配置することはできない。かくして、アリストテレスの学知条件を備える論証理論を規範とした発見的探究における、発見事物・事象の分節化は B8 における月蝕や雷の事例がモデルとなり、論証知つまり学知の把握へと向かう。そのさい論証の理論的枠組のなかにおける探究の同数性テーゼつまり何であるか、さらには何故にかにも探究と学知が成立することは保持され、何であ

るかの論証の可能性という B3 以降の課題に対応できる理論となる。

B9 において、論証理論が前提する因果論的な構造のなかで、何であるかがどのような役割を担うか、明確にする試みがなされる。まず、B8 の分類に基づき、事物・事象と根拠の関係が二つ区別される。(β) 異なる根拠があるものと、(α) 同一なものである。この論証理論の枠のなかで何であるかの種類と取り扱い方がまとめられている。

従って、何であるかがあるものどものなかでも、一方、或るものども⁽²¹⁾は無中項であり、そして原理であるが、それらはその存在と何であるかに関して、基礎に指定されねばならないか、または他の仕方でも明らかにされるのでなければならない。算術者がなしっているのは、まさにこのことである。即ち、一とは何であるかそしてそれが存在することを基礎に指定している。他方、中項を持つものどもについては、そして実体に関して⁽²²⁾異なる根拠があるものどもについては、既に述べたように、何であるかを論証することはないが、論証を通じて明らかにしなければならない。

(93b21-28)

ここでは、事物・事象とその何であるかが同じものは論証理論においては無中項の項であり原理であるとされる。論証の原理に関しては、個別科学者はそれを論証不可能なものとして、基礎に指定する。他方、事物・事象とその根拠つまり何であるかが異なるものについては、B8 の結論において述べられたように論証を通じて明らかにされる。ここでアリストテレスは、根拠との関連様式に即して存在者を論証可能性と論証不可能性により二種類に分け、論証を通じて得られる定義と不可論証的なものの定義の区別をなしている。そのことは算術における無中項の原理である「一」が不可論証的なものの事例とされていることから明らかである。この区別は論証理論の構造から必然的に導かれる形式的なものであると言ってよい。

中項を持つものどものなかで、実体との関連で根拠が事物と異なるものが挙げられるが、これは実体をもつば無中項の原理として扱われる懸念を取り除くために言及されている。太陽や人間、靈魂等の実体は優れて発見的探究論

の対象であるが、実体のうち、いかなるものが論証不可能であるかは論じられることはない。論証理論に基づく一般的区別により、定義獲得の方法の相違の存在を確認するだけでここでは満足している。ここでは事物・事象と根拠の同一性／異他性基準が提示されなかったため、その区別の基準設定は『形而上学』に持ち越され、その主要課題となっている。(90a9-12, 93a23f, *Met.*, Z4-6, 12, 17, H3)

7

アリストテレスは B10 において、これまでの議論を受けて、論証理論を規範枠とした探究論において見出される定義の種類を整理している。これは B8 における問い (E) 「定義は何であるか」に対する応答である。この章を彼が新しい探究論においてめざしていた非関連性テーゼの克服という視点から読む時、最もよく理解できるように思われる。そのことは「何であるかの論証 (推論)」(94a2, a8, a12, a13, a14f) というこれまで否定されていた句が復活していることに見出される。彼はこの章を「何であるか」という問いに対する応答となるものは、定義であると「語られている」というアカデメイアの実情の確認から始めている。ピュタゴラス以来、「何であるか」と「何故にか」という問いに対する応答が事物・事象の根拠に言及するものであったという事実がアリストテレスにとって、分割法にかわる新しい定義論確立の基礎であるが、定義は基本的には「何であるか」という問いに対する応答であることにはかわりがなく、その応答の種類が定義の種類を構成する。そして彼は、まず、それらのすべてが論証といかなる関係にあるかを明らかにすることをめざしている。

彼はまず「何であるか」の問いが定義を構成することを確認し、探究の端初において不可欠な、名前が何を意味するかの説明言表を一つの定義のタイプとして提示している。

定義は何であるかの説明言表と言われるので、一方或る定義は名前や名前のような他の語句が何を意味するかの説明言表であろう

ことは明らかである。例えば、「三角形」が何を意味するかというものである。これが存在することを把握して、われわれはそれが何故に存在するかを探究する。しかし、われわれが存在することを知らないものを、このように把握することは難しい。その難しさの理由は既に述べられた。即ち、われわれはそれが存在するか否かを、付帯的にでなければ、知らないからである。説明言表が一つであるということは、二義的である。一つは『イリアス』のように、結合によって一なるものである。他は、一つのものについて一つのを付帯的にでなく明らかにすることによって、一なるものである。(93b29-37)

第一の定義は名前が何を意味表示するかの説明言表である。これが「或る定義」であるとされるのは、「何であるか？」という問いに対する応答として成立しうるからである。B7において名前が何を意味するかの説明言表が架空の存在者にも成立するものとして紹介され、実体にこそ第一義的に存在する定義との対比が論じられていた。しかし、ここではこの種の説明言表は「或る定義」という仕方限定され、論証を規範枠とする探究過程に組み込まれ、この定義は論証形成の準備段階という役割を担っている。だが、この定義はチャールズが指摘するように意味論上浅く、その指示対象の存在やその本質に対する何らかの見解や知識を要求することなしに得られるものであり、他の三つの定義のタイプとは異なる次元のものである。⁽²³⁾ 語の意味の何かを述べる説明言表は「定義の[なかの]一つの定義」(93b38)とされ、探究の文脈において「何であるか」という問いへの応答の一つの種類として論証により存在を確立する前段階として機能している。

第二の定義は「何故にあるかを開示する説明言表」である。(93b38f) これは第一の定義が「意味する」ものであるのに対し「証明する」ものである。これは「論証とは配列において異なっているが、何であるかの論証のごときもの」と言われる。(93b38-94a2) この定義と名前の意味の説明言表としての定義のタイプの差異は説明言表の一性における差異として現われる。これは「一なるものについて一なるものを付帯的にではなく開示することによっ

て」獲得するタイプの定義である。一つの説明言表があると言っても、それは二義的であり、前者は単に人為的に定義項を結合させてそれに名前を付したそのような一性であり、後者は、定義項と被定義項の関係が付带的ではなく、自体的な関連としてある場合に成立するものである。そしてその自体的関連を確立するのが論証の務めである。

このタイプの定義こそアリストテレスが求めた論証と定義の関連性を表わしている。この定義は、中項が、結論となる大項と小項を関連させるという仕方、で、その結論の何故にあるかを明らかにする論証を通じて、実質上同じ説明言表を獲得し、B3で主張され、競合理論が乗り越えることのできなかった論証と定義の非関連性テーゼを克服している。アリストテレスは雷の事例により次のように述べる。

何故に雷は起きるのかを語ることと、雷は何であるかを語るとは異なる。というのも、ひとは一方では、「というのも火が雲間において消されることの故に」と言うであろうからであり、他方、「雷とは何であるか」[と問われて]、ひとは「雲間において火が消されるさいの音響である」と言うであろうからである。かくして、同じ説明言表が別の様式において語られる。そして前者は連続的な論証であり、後者は定義である。(94a3-7)

これは B2 における音楽における和音と天文学における月蝕の事例による説明と実質的には同一である。「何であるか」と「何故にか」という双方の問いに対する応答は、実質上、透明なほどに同一であるという事情が、この定義のタイプを保証するものである。これは、根拠を語ることが「何であるか」に対する応答になっているという、ピュタゴラス以来の現用言語の規範性に訴えた論拠である。

ここに定義と論証の相互依存関係が明らかである。探究の第一段階において、名前の意味表示の説明言表を獲得し、その存在の探究がおこなわれ、その存在は中項を通じて「何故にあるかを開示する説明言表」を得て論証され、さらにその論証を通じて十全な定義が獲得される。しかし、第一段階の定義は名前の意味にかかわるもので、定義を得るために定義を前提する類の論点

先取とは異なり、同僚たちの誤りを回避している。

第三の定義のタイプは「雷の[一つの]定義は「雲間における音響」であるが、これは何であるかの論証の結論である」というものである。(94a7-9) 何故わざわざ第二の定義の部分が定義の一つの種類とされているかは問われてしかるべき疑問である。最も単純で魅力のない答えは、「何であるか」の問いによって、根拠への言及のない事象だけを問うということがあるというものである。そのようなトゥリヴィアルな応答をしても空しく、このタイプも非関連性テーゼの克服という視点から論じられるべきである。アリストテレスはここで、先に「定義論の二つのアポリア」と呼んだものの克服を念頭にこの定義のタイプを提示していると思われる。定義項がいかにして或る被定義項のそれであり、被定義項の存在をいかに確定しうるのかというアポリアとの関連でこのタイプの定義を提示していると思われる。例えば、何故「中心から等しい図形」が「円」の定義項であって、「山銅」のそれでないかを確定するために、彼は代替原理を B8 において提示していた。そこで展開する好ましい論証の項構成として、雷の場合、雷が音響と代替されるものとされていた。(93b9, 11) つまり論証の結論は「雷が雲間における音響に属する」であってはならず、「雷／音響が雲間に属する」でなければならない。もし雷の代わりに音響を用いるとすれば、そこから「雲間における音響」が「雷」の定義項であると述べることができよう。さらに雷の存在もこの論証を通じて確立されることになる。新たな探究論における好ましい論証においては、それ自身としては定義的關係においてない結論の項連関から、それを通じて定義を形成しうるものでなければならない。つまり、論証の結論から構成される第三の定義は定義項と被定義項の関連を明らかにするタイプとして彼の探究論において重要な役割を担っている。これが「何であるかの論証の結論」(94a8f, 13) と呼ばれるものが定義として提示される理由である。

第四の定義は B9 において言及された「無中項[の項]についての定義は何であるかの論証不可能な定立である」である。(94a9f) これは類の原理として論証形成の基礎におかれる定義である。従って、論証と定義の関連性としては、第二、第三の定義のように論証の形成を通じて得られるものではないが、

この定義の支配の下にその類のすべての論証が秩序づけられるそのような定義であるということが挙げられよう。私はこのタイプは論証科学においては例えば、幾何学における「大きさ」や算術における「一」のような第一原理に関する、本質 TEE の説明言表であると解する。これ自身は B6 における議論から明らかなように、論証の前提になることはありえない。「論証不可能」ということで、B8 における存在者の区別に見られるように、事物とその根拠の同一の事物が想定されている。

このように B10 における最初の四つのタイプの定義の枚挙は論証と定義の非関連性テーゼの克服という視点から展開されている。定義が論証との関連性において見られた新しい定義論である。しかし、この定義論の結論においては第一のタイプの定義は言及されずに、三つの定義があたかも以上の議論の結論であるかのごとくに述べられている。

従って、一つの定義は何であるかの論証不可能な説明言表であり、もう一つは、論証とは様式において異なる、何であるかの推論である。第三は何であるかの論証の結論である。(94a11-14)

定義の種類は四つであるのか、三つであるのか見解が分かれている。上で見てきたように、非関連性テーゼの克服という視点から B10 の定義論はなされ、探究論において登場する定義は四種類であることが明らかにされた。しかし、この結論部における三つの定義において共通していることは、「何であるか」への一様な言及である。名前の意味表示の説明言表は「何であるか」という問いに対する応答の一つのタイプではあるが、彼が探究論において知識として獲得をめざしている「何であるか」に対する説明言表ではありえない。B8 冒頭における問いは (F)「はたして何であるかについて論証そして定義はいったいあるのかそれともあらぬのか」(93a2f) というものであった。そのさい、そこでの「何であるか」は存在の根拠と同定されていることからわかるように、存在の確立の後に獲得される探究の目標とされるものであった。論証理論を規範枠とする探究論においては、対象の何であるかは論証可能なものと不可能なものに分類されることが論じられたが、そこで求められている「何であるか」は意味論上浅い「名前が何を意味するか」ではない。

換言すれば、何を意味表示するかの説明言表はここで問われている論証や定義ではない。従って、結論部の三つの種類は B8 冒頭の問い (F) への応答である。四つの定義は論証理論を規範枠とする探究論において登場するが、何であるかの論証の可能性という彼の目標からすれば三種類の定義が挙げられている。このように見る時、定義の種類は三種類であり、また四種類であると矛盾なく語ることができる。⁽²⁴⁾

本稿の目標との関連で、重要な問題として残るのは、なぜこの定義論において「本質 TEE」が明示的に言及されていないのかという問題である。クセノクラテス等が試みた本質 TEE の推論と実質上同じ本質 TEE の定義が論証を通じて獲得されるものなのかが問われる。というのも、本質 TEE は『トピカ』において分割法のもとに自体的同一性として提示されたものであり、分割法は根拠を根拠として開示することができず、その導入の経緯は非因果論的なものであると思えるからである。論証を通じて本質 TEE としての何であるかが明らかになるのであるとすれば、本質 TEE は根拠とその帰結としての事物・事象という枠のなかで、新たに、事物・事象そのものとして規定されることになる。本質 TEE は分割法によってだけでなく、論証を通じた因果的な定義によっても開示されることになる。ここでの定義が、例えば「雷」と「雲間において火が消されるさいの音響である」とのあいだに自体的同一性が成立しているとするなら、本質 TEE が獲得されているということ拒否する理由は何も存在しないように思われる。説明言表の一性の一つの様式は自体的な連関を形成することによって得られるものであった。(94b36f) B8 において「本質 TEE」と「事物・事象そのもの」が探究論の目標として組み込まれていた。(93a19, a22) そうであるとすれば、第二定義と第四定義における「何であるか」は本質 TEE の意味であると理解することもできよう。しかし、類と種差による定義と何故にあるかを開示する説明言表や何であるかの論証不可能な説明言表との関連が明確にされない限り、本質 TEE をめぐる定義論としての扱いは確定しないと思われる。アリストテレスが B13 において「何であるかにおいて述語となるものをいかに狩るべきか」(96a22) という問いのもとに類と種差による分割法を有効な手続きとして用

いていることは、この問題との関連で示唆を与える。しかし分割法の役割さらには本質 TEE の探究は全体として『形而上学』に持ち越されている。ここでは本質 TEE を B10 の定義論に読み込む可能性を指摘するにとどめたい。

アリストテレスは B10 の終わりで、B3-7 そして B8 冒頭の課題が解かれたことを結論としている。

それ故、語られたことどもから、(A) (F) 何であるかについていかに論証があり、またいかに論証がないかは、そして何に論証があり、また何に論証がないか明らかである。さらに、(E) 定義はどれほどの意味で語られるか、また (B) 定義はいかに何であることを証明し、またいかにそうでないか、そして (C) 何について定義はあり、また何については定義はないかが明らかである。尚、(1a) (1b) 定義は論証に対してどのような関係にあり、また (2) (3) 同じものについていかに定義と論証がありえ、またいかにありえないかも明らかである。(94a14-19)

われわれはこれまで、アリストテレスが B3-7 のアポリアを受けて、B8-10 において新たな探究論を展開したこと、さらにその議論がこれらの問いへの応答となっていることを、彼がアカデメイアにおいて置かれていた状況がいかなるものであったかを確認しつつ見てきた。(尚、このまとめに含まれていない B8 冒頭の (D) は「これらの議論のうちの何が正しく、また何が正しくなく語られたか」という一般的な問いであった。(93a1f) 実質的にはアリストテレスは B3 と B8 の問いすべてに対応している。)

8

ここで、「本質 TEE」を理解するうえで重要な『分析論後書』B11 における所謂四原因の一つとして本質が挙げられている問題を取り上げる。通常、四原因のリストに登る形相因と質料因のかわりに、「本質 TEE」と「どんなものどもがある時、これがあることは必然であるかということ」が挙げられている。(94a21) 後者の表現において、根拠と看做されているのは「どんなもの

どもがある時」の「どんなものども」であり、それがあつた時、何かが必然的にあることになる、そのような意味での根拠であると理解できよう。これを一応「必然因」と略称することにする。このリストに形相と質料が欠けていることは道理のあることである。世界の因果論的構造を前提にした、個別諸科学における根拠の探究においては、論証は根拠とその働きの結果である事物・事象を特定する条件として機能する。彼の存在論構築における優れて中心的な役割を果たす根拠としての形相と質料は『分析論後書』において一切登場しない。もちろん、それらは個別諸科学において学知をもたらず論証理論とも密接な関係をもたざるをえないが、『分析論後書』においては、その問題は『形而上学』の課題として先送りされている。

ここでの問題は、競合理論により探究の目標とされ、アリストテレス自身もそれを自らの探究論に取り込んでいる本質 TEE は事物・事象それ自体のことであるとして、それがいかなる仕方で結論を結び付ける中項としての根拠という役割を担うのかということである。アリストテレスは「これら[四原因]すべては中項を通じて証明される」と述べ、論証理論を規範とした探究論の文脈を維持したまま根拠の分類を試み、そして一つの根拠のタイプとして本質 TEE を挙示している。(94a23f) 彼は次の事例により、本質と必然因を説明する。

「何故に半円に内接する角は直角であるのか」。「何があれば、[半円に内接する角は] 直角であるのか」。そこで、「直角」を A とし、「二直角の半分」を B とし、「半円に内接する角」を Γ とせよ。実際、A「直角」が Γ 「半円に内接する角」に属することの根拠は B である。というのも、一方これ [B] は A に等しく、他方 Γ は B に等しいからである。即ち「二直角の半分」である。かくして、B「二直角の半分」があるので、A が Γ に属する。これ「[A が Γ に属する]」は、半円に内接する角が直角であることであった。しかし、これ [B] は、[Γ の] 説明言表を意味することによって、[Γ の] 本質 TEE と同じである。中項 [B=必然因] は [Γ の] 本質 TEE であり、根拠であることが証明された。(94a 28-36)

この事例においては、「B「二直角の半分」があるので、Aが Γ に属する」は必然因による証明であると言える。そして、必然因はここでは同時に本質 TEE でもあると主張されている。というのも、半円に内接する角が直角であることの説明言表は B であり、それにより B は「半円に内接する角であること」を意味するからである。「二直角の半分」ということでアリストテレスの念頭にあるのは、補助線の作図による証明の試みである。彼は半円に内接する三角形に円の中心から円弧上の角に直線を引き、二つの二等辺三角形を作ったと考えられる。そうすると Γ の角度は二つの二等辺三角形の底角となり、円の中心をめぐる二つの角の和が二直角であることを考えあわせると、それは二直角の半分である。こうして B により A が Γ に属することが証明される。補助線の作図を用いた証明過程において「二直角の半分」があることが証明され、その存在により、半円に内接する角が直角であることが証明されており、トゥリヴィアルな同語反復ではない。

これは B がその必然因であることの証明であるが、アリストテレスは「これ [B] は A に等しい」(94a31) ために、B が Γ の本質 TEE であるとも主張している。このケースにおいては必然因と本質は同一であるが、この同一性は事實的であり、常にそうであると考えているわけではない。アリストテレスは「光がランプを通る」事象について、「その微細な粒子が大きな通路を通過するのは必然的である」という説明と「つまづかないため」という目的因による説明の双方が与えられると述べているが、これと同様な事情と看做すべきある。(94b27-31) 同一の事物・事象について中項が必然因でありまた本質 TEE であることも、必然因であり目的因であることも状況によって可能なのである。

問題はこの推論が B8 において展開されたアリストテレスが好む論証の項連関とは異なることである。月蝕や雷の論証においては、結論は定義であってはならなかった。代替原理のもとで、被定義項と定義項の代替が可能でなければならなかった。それ故に、B11 の推論は同僚たちの企てに名付けた「何であるかの形式言論上の推論」であると解することは十分に可能なことである。しかし、ここでは「何故に半円に内接する角は直角であるのか」(94a28)

が問われ、その定義が求められていないということを勘案すべきである。何であるかの論証が求められているわけではない。ここでは半円に内接する三角形が一つの必然的な属性つまり直角を持つことの証明が求められているのである。その証明の過程において、事実として、事物そのものとしての本質 TEE が中項の位置を占めたのである。B6 における推論のように、本質 TEE を容認仮定し、結論を導出したのではない。われわれは現今の幾何学において、先の補助線による三角形に基づく証明は「半円に内接する角」についての科学的知識を与えると理解している。ここでは定義形成における被定義項と定義項とのあいだの関連性の要請は存在しない。従って、ここでは別の目的のために、B8 とは別の項連関のタイプの論証が用いられていると理解しておこう。

もう一つの問題は、本質 TEE はロギコースに語られる定義形成によって開示されるということが、ここでも妥当するかということである。私は先の結論「半円に内接する角は直角である」は Γ の本質 TEE つまり自体的同一性を表現する命題であると解した。そしてさらに、「これ [B] は A に等しい」(94a31) ことから、B「二直角の半分」も「半円に内接する角であること」を意味し、 Γ の本質 TEE である。重要なことは B は A が Γ に属することの根拠であるが故に Γ の本質 TEE なのではなく、「半円に内接する角であること」という Γ との自体的同一性の故に、その本質 TEE であるということである。このように考える時、根拠の一つのタイプとして本質 TEE が挙げられていることは、これまでの私の本質 TEE 理解と矛盾するものではないと言える。

しばしば、本質は形相と同定され、そしてそれが質料の根拠であるが故に本質であるという仕方、因果論的に論じられることがあるが、この箇所においてはそのような議論はなされてはいない。⁽²⁵⁾ この箇所においても、本質 TEE は何かが何かの根拠であるが故に本質 TEE と呼ばれるのではなく、自体的同一性の関係を形成する項が本質であり、論証の中項となりうるということである。

9

最後に、アリストテレスのその後の探究論における本質 TEE の取り扱いをめぐって、『形而上学』の議論、特に Z17 を検討し、本質 TEE が存在論においてどのような位置を得るか素描しておきたい。

彼は、所謂四原因の枚挙の箇所で、「プラトニストたちはアイデアが他の事物・事象のそれぞれにとっての本質であると証明している」(988b4f) と述べており、プラトニストが根拠とする「何であるか」は事物・事象それ自体としての「本質」と同定されている。アリストテレスの「実体すなわち本質」が四原因の一つであると主張する論拠は次のものである。「というのも、何故にかは究極の説明言表に導かれるが、第一の何故にかは根拠でありまた原理であるからである」。(983a28f, cf.194b16ff) ここで「究極の説明言表」とは事物・事象それ自体をつまり一なる全体を意味表示する、適切な定義であると理解すべきである。というのも、本質は固有定義により意味されるものであることが『トピカ』のプレディカピリア論において確立され、その後の定義論の方向を決定しているからである。根拠は「何故にか」の問いに対する応答において明らかにされるものであるとして、第一の何故にかは事物・事象それ自体を意味表示する説明言表により与えられると理解できよう。

『分析論後書』B巻においては主に事物・事象とその根拠を異にする始動因や目的因をめぐる因果構造をモデルに、説明論的アプローチが企てられている。『形而上学』Z17 においては、その論証による説明論的アプローチの実体への適用可能性が、それも「可感覺的実体から離存している実体」への適用可能性が探られている。その章において、理由の探究は、「何故にあるものが何か他のものに属するか」という仕方で分節されねばならないとされ、「何故に同じものは同じものか」という問いの立て方は、「何も探究しないことである」と言われる。(1041a10-15) 彼は自己言及的な理由の探究が無意味である理由を、探究論の不可逆的なプロセスを再び呼び起こすことにより答えている。

というのも、事実と存在は、例えば月は蝕を蒙るということであるが、すでに明らかなものとしてあらねばならないが、しかし、事物・事象それ自身がそれ自身であるということは、何故に人間は人間であるのか、何故に芸術家は芸術家であるのか、というたぐいのあらゆるものについての一つの説明言表でありそして一つの根拠であるからである。ただし、[そこで]ひとがそれぞれは自らに対し不可分割的であることは、一つであることであったと語っているなら別であるが。しかし、それはすべてのものについて共通でありそして近道 [な応答] である。(1041a15-20)

「何故にか」という問いは、探究の順序として、「事実」ないし「存在」が確立された後に問われるべきものである。それは論証の条件を満たす主語述語命題によって確立される。それに対し、「事物・事象Xはそれ自身Xである」というトートロジー言明には論証は成立しない。『分析論後書』B巻で構築された四つの探究項目からなる探究論は実体の質料形相論による探究においても適用されている。ここで一つ明らかなことは、トートロジー言明が、「何故にXはXか」という理由の問いに対する応答でありうることをアリストテレスが認めていることである。論証の規範枠のなかで探究のプロセスを辿ることを無視した形の問いは探究を前進させないという意味で、何も探究しないことであるが、探究のどの段階であるかその実質を考慮に入れることをしないのであれば、それは問いうる問いであり、その答えは、たとえ内容空疎ではあっても「それ自身の故に」と語ることはできるのである。これはロギコースな仕方での応答である。「何故に同じものは同じものか」という問い、そして「すべては自分自身である」という応答は、それが何らかの仕方で存在しているということを知らずにも語りうる事柄であり、一つの根拠ないし理由を述べている。ただし、「Xは自らに対し不可分割的であること」はそれが「一であること」だという理由ではなく事実の言明をそれにより行っている場合は別である。⁽²⁶⁾

具体的な問いとして、「何故に人間は人間であるのか」という問いに対して、「人間は人間それ自身であるが故に」という応答は一つの根拠を提示してい

る。これは探究を進めないが、ロギコースには真実である。何故にに対する応答として、それ自体を答えることは「ロギコースに言えば本質である」(1041a28)と言われる事柄である。四原因の一つが「本質 TEE」と言われ、それが「本質の説明言表」としての「形相」として言い直されることもあるが、前者はロギコースな仕方での「何故にか」という問いに対する応答であり、後者は具体的な形相としての存在者への言及が不可欠なピュシコースな仕方での応答である。「まさにそれであるところのもの」という応答は内容空疎ではあるが、事物・事象が、それについて一つの定義が成立する一なるものにしかそのような応答はなしえないので、「いかに語るべきか」という視点から探究の一つの条件を設定する機能は果たしている。形相は一なる全体としてある存在者にあるが、形相の探究は「本質そしてその説明言表がいかにあるかを忘れてはならない、それなしに探究することはなにもしないことだからである」(1025b28f)と言う仕方では、ロギコースに語られる本質に関して、世界におけるピュシコスなあり方つまり実質的なあり方として探究されるものである。この形相はプラトンのアイデアのように分析不能な何ものかではなく、質料を統一するものとして説明言表の形成のうちに開示されるものである。『トピカ』において形式的な把握に終わっていた本質が、『自然学』や『形而上学』においては明示的に事物それ自体と形相という二義を持つにいたる。そこでは「根拠のあるものは本質であるが、本質は全体すなわち合成であり、そして形相である」(195a20f, 1013b22f)と「本質」の二義性が明言されている。事物それ自体としての「本質」は形式言論上論じられるが、この両義性を許す存在論的な保証の探究が『形而上学』の一つの大きな課題となる。

結 論

論証と定義の非関連性テーゼはいかに克服され、何であるかの論証がいかなる仕方でありうるかが以上で明らかにされたこととしよう。伝統的に探究の対象とされてきた「何であるか」は定義により開示されるものであるが、「何であるか」が何であるかは論証を枠とした発見的探究論構築のさいに解明

され、一つは存在の根拠のことであり、他は事物・事象そのもののことであり、さらには論証の結論のことであった。従来はこの分節がなされずに、「何であるか」の理解はあいまいなままであった。アリストテレスは「何であるか」による問いと「何故にか」による問いに対する応答が実質上同一であるという、現用言語の規範性に則り、論証を通じた定義の獲得に向かった。従来の競合理論の問題点を乗り越えて、探究論における論証がいかなる構成を持つものでなければならないか、さらには、論証に基づく定義と、論証が前提にする定義がどのようなものであるかが開示された。さらに、本質 TEE はソクラテスが言論による探求において求めようとしていた自体的同一性という性格を保持したものととして、『トピカ』において分割法のもとで類と種差により解明されると理解された。しかし、『分析論後書』においては因果論的構造のもとで根拠とその帰結により解明されるものとして捉え直されていることは、探究論の方法論的展開に基づく重要な進展であると言える。とはいえ、本質 TEE という概念そのものはロギコースに論じられるものであり、ピュシコースに何かが何かの根拠として開示されるものではなく、あくまでも自体的同一性としての存在者であり、それが論証理論の枠のなかで具体的にはピュシコースに探究され、根拠としての機能を担いうるという点においてはかわりはない。『分析論後書』における探究論の構築はアリストテレスにおける因果論的展開と呼ぶべきであろう。

註

- (1) 『トピカ』において、「人間は何であるか」や「善はどれほどの仕方で語られるか」は「弁証術の命題ではない」とされる。(158a14-17) 弁証術においては問いは「イエスカノー」で答えられる命題の疑問形の形式で提示され、「何であるか」を問うてはならない。(158a16f) トポス論においてはプレディカビリアの一つを述語として、例えば、「二本足の動物は人間の定義であるかそれともそうでないのか」という仕方では提示しなければならないとされる。(101b32) このようにソクラテスの弁証術はアリストテレスにおいてプレディカビリアのもとに問答の方法が提示され、通念のもとに問答による探究として継承されている。ロギコースには、つまり形式言論上は、定義がそれとして成立するた

- めには、被定義項と定義項の同一性の保持が要求されるであろう。そしてそれらが端的な同一性を保つためには、永遠な普遍不動なものに、「何であるか」が求められることになるであろう (987a29-988a17)。
- (2) 拙稿「アリストテレスにおける本質 (to ti ēn einai) の非因果論的解釈—その使用の文脈と言語分析を手掛りに—」(北海道大学文学部紀要 47-4 No.97 1999) 参照。
- (3) eg.H.Besnon, *The Priority of Definition and the Socratic Elenchus, Oxford Studies in Ancient Philosophy* 8 1990.
- (4) Smyth, *Greek Grammar*, p582, (1920), 1980.
- (5) to dioti と to hoti の名詞化の他の例としては eg.74b30, 75a35, 78a22, a37, 86a2, 87a32, 89a15f, a21, 981a29.
- (6) H.Byrne は to dioti に問いの目標として “the why?” の意味とそれへの応答として “the reasoned fact” の二つがあるとし、「別の文脈において、アリストテレスは言語上の異形として to dia ti をも用いるが、その意味は正確に同じである」(p.87, p.236) と述べる。しかし、to hoti との対応として理由節を導く to dioti があり (eg.94a4), dia ti (eg.90a15, 16, 17) ないし to dia ti (90a1) は疑問文である。P. Byrne *Analysis and Science in Aristotle* 1997.
- (7) 実体と属性という区別を読みこんでいるものの例として註(11)における G.Lobo の場合がある。ものとことという区別を読み込むものとしては例えば B.van Frassen がある。B.van Frassen, *A re-examination of Aristotle's Philosophy of Science*, p.22, *Dialogue* 1980.
- (8) ロギコースとピュシコースというアリストテレスの方法論に関しては、拙稿「アリストテレス哲学における方法論」(『ギリシア・中世哲学研究の現在』哲学会, 有斐閣 1998) 参照。ロギコースを「概念分析」と理解する立場は例えば, E.Berti や G.Owen に見られる。E.Berti, “Does Aristotle's Conception of Dialectic Develop?” p.114, *Aristotle's Philosophical Development*, ed. W.Wians 1996, G.Owen “Tithenai ta phainomena” (1961), *Logic, Science and Dialectic*, p.240, 1986.
- (9) A 4 の詳しい分析については拙論 *Aristotle on Explanation: Demonstrative Science and Scientific Inquiry*, Part I, ch.2 Sec.D pp.78-96 (北海道大学文学部紀要 40-1, 1991) 参照。
- (10) 「還元」という解釈をする立場は例えば, Barnes, 河谷を参照。J.Barnes, *Aristotle Posterior Analytics*, 2nd. ed.p.205, 1994, 河谷淳「アリストテレスにおける論証とアイティア」p.28 (課程博士論文(東京大学)) 1997。90a37 の anagōgē には何かを他のものに還元し、その何かをなしですませるという reduction (eg.D.Ross, *Aristotle Prior and Posterior Analytics*, p.613, 1949, Barnes, *ibid*, p.49) という意味はない。Liddle&Scott によれば leading up, bringing upstream, つまり導き上げることが原意である。そこでは何であるかの諸レベルの発見知を論証知に導き上げる様式が何なのかが問題とされ

ている。Liddle&Scott, *Greek English Dictionary*, p.102, 9th ed.1996.

- (ii) 例えば D.Ross は属性や事象の存在と本質に関する問いは基体への内属関係として、二つの項連関からなる事実と理由の問いに還元可能であり、中項を問うとするが、実体に関しては困惑を隠さない。「しかし、いかにして実体に適用される ei esti ないし ti esti は中項と関わるべく、想定されうるであろうか。実体は何ものにも内属しない。その間に中項が見いだされうる二項はない」と述べる。そして彼は、実体を探究対象から除外する消極的な解決案を示す。「B1 で実体に適用されている存在と何であるかの問いは、B2 になると属性と事象に一層言及されるようになり、実体への言及はその形跡は残るものの、ほとんどアリストテレスの心から退いてしまっている」(ibid, p.612)

G. Lobo は Ross 等を参照しながら、「どうして単称項と述語「存在する」の間に中項はありうるのか」というアポリアを提示する。彼は唯一の解決案として ei esti の新たな読みを提案する。ei esti を存在の問いとは探らずに、「 γ はケンタウロスであるのか神であるのか否か」という、まだ同定されていない指示詞に実体ないし半実体を述語づけることによる同一指定化の述語用法の問いと解する。他方、事実の問いは同様に述語用法であるが、同定されている実体に非実体を述語づける特徴化と解される。私は従来通りに読んでも Ross のように消極的な結論に陥ることはないと考えてるので、ここで Lobo の見解に立ち入ることをしない。ただ彼が認める箇所以外にも多くの ei esti の箇所は Lobo の読みを許さず、存在に読むべく支持していると思われる。(eg.83a33, 1025b16) 何よりも、われわれが最も基本的な問いの一つとして、実際に発見知を求めて何かの存在を問うという現実が最も容易で主要な Lobo 批判となるであろう。(G. Lobo, *The So-called Question of Existence in Aristotle AN.POST*, 2, 1-2, *Review of Metaphysics*, pp.73f.1980. 拙稿「アリストテレス『分析論後書』における発見的探究論と論証」『哲学』No.36, (日本哲学会編) 1986, 尚 Aristotle on Explanation, Part II ch.2, Sect.A pp.3-16 (紀要 40-2, 1992) 参照)。

なお、T.Upton は G.Owen を参照しながら、例化により答えられる「日常の存在の問い」と根拠の知に向けられる「科学的存在の問い」を区別する。彼は「私の立場は、なるほど異なった二つの(またはそれ以上の)種類の存在 [i.e.「可感覚的で、消滅的な個物」と「永遠なるもの」p.106] があるでもあろうが、あるかの問い (if-it-is question) には少なくとも二つの段階、そしてそれ故に対応する二つの種類のあるかの問いが存在し、ただ最初の段階だけが例化により適切に答えられ、ただその第二段階だけがアリストテレスにとって重要な科学的役割を演じるというものである」と述べる。(The If-it-is Question in Aristotle, p.106 *Aristotle Critical Assessments Vol.I* (1991), 1999) しかし、形式的に区別された四つの探究項目のうち、存在の問いをこのように二つの実質的に異なる応答内容により「二つの種類」に分けることは、不必要である。「概念や記述が例化されるか否か」という「一般的な例化の問い」(p.104) が問われているのではない。存在の問いは発見と対に提示されているのであり、個物であれそれが発見される時、神やケ

ンタウロスという概念の例化としての存在だけが見い出されるのではない。この Upton の区別も問いの構文上の区別と発見の豊かさという視点を持たないことからなされている。

- (12) Barnes, *ibid*, p.205. 問うということ一般の整理として、これらの四つの探究項目を挙げるが、「いかに」や「どれほど」という問いも、「その方法は何であるか」(cf.90a36)や「その量は何であるか」という仕方でも「何であるか」の問いとして問いうるであろう。そこでも形式的には、何らかの方法や量があるという認識に続いて、それらが問われることにはかわりない。義務の問いも、「それを行う義務は彼に属するの否か」と事実の問いとして問いうるであろう。
- (13) R.Mckirahan も「一般に、事物の知識はその事物の事実の知識に帰することになる。そしてこれらの事実は命題において表現されるであろう。かくして、私は原理、結論等に言及するさいにそれを命題として、事実として、或るいは、適切と思える時には双方として言及することを躊躇しない」と述べる。(R.Mckirahan, *Principles and Proofs*, p.23, 1992) Byrne もこれに同調し、アリストテレスの科学の理論は「非—事物的な事実(諸関係)」に関わるとしている。(ibid, p.236) しかし、これらの見解においては発見ということが語られる対象は探究される対象と同じだけあるという彼の探究論の持つ同数性テーゼが見逃されることになる。
- (14) Ross は同数性テーゼと学知条件を見過ごしたが故に「何であるかはそれ自身を何故かに還元している」(ibid, p.612) とするが、還元はされてはならず、(I & II) 中項の探究が発見的探究のゴールであるという学知条件が提示されている。さらに、Ross は根拠は中項によってのみ知られるという趣旨を見逃したが故に、「中項により、アリストテレスは結論をうち立てるべく用いられるであろういかなるそしてすべての項を意味せず、……説明されるべき事実の實在における現実的理由を意味している (90a6-7)」(ibid, p.611) と発見の探究における中項の役割を認識できずにいる。
- (15) D.Charles, *Aristotle on Meaning and Essence*, p.203, 246 cf.204, 2000.
- (16) これは D.Charles の「独立性問題」さらには「形式的問題」と重なる。「独立性問題」とは「もし定義が論証とはあらゆる点において異なっているなら、定義される種の存在を確立するのに十分な論証の結論を知ることなしに、定義を知ることが可能となろう。しかし、これは不可能である」というものである。「形式的問題」とは「もし推論の結論が形式において定義と異なるなら、どうして論証は定義を確立するのに有益でありうるのか」というものである。私の論証と定義の非関連性テーゼの克服もこれらの問いに回答できるものでなければならない。D.Charles, *ibid*, p.60f.
- (17) B4, 91a12-32 の詳しい分析は拙稿 *Aristotle on Explanation, Appendix, The Non-demonstrability of Essence*, pp.77-89 参照。
- (18) Philoponus は「定義の論証が成立することは可能である」を、Barnes も同趣旨で「君は X が何であるかを或る仕方でも論証することができる」を補っている。(Philoponus, *In*

Aristotelis Analytica Posteriora Commentaria, ed. M. Wallies, p.365, 1906, Barnes, *ibid*, p.207) この見解の賛同者は [P'] が暗黙の後件 [Q] の理由を、とりわけ「何らかの仕方で」(a3) という限定との関連で、与えているとするであろう。つまり、「何らかの仕方で」とは、例えば何であるかとしての根拠は論証の結論ではないという仕方、論証において取り扱われうると解するであろう。その時、全文は「Xの何であるかを知ることとそれが存在するかの根拠を知ることと同じであるので、何らかの仕方、何であるかの論証がある」となろう。[P'] を論証の範囲を限定すべく用いるのと同様に、この見解の賛同者は次のようなこの暗黙の後件挿入の論拠を挙げるであろう。

(前提1) 論証は現実に「Xが存在することの根拠」を証明する。(90a15, a31f, 93b 38-94a2, 85b23f, 88a2-6)

(前提2) 定義はXの何であることを証明する。(91a1, B 10)

(前提3) Xの存在の根拠とXの何であるかは同一である。(90a14f, a31f, 93a3f)

(結論) 何らかの仕方、Xの何であるかの論証が存在する。

しかし、Zabarella は「私が推測するに、何も付加されるべきではなく、アリストテレスの文は完全である」と述べ、ここでどんな後件をも必要としないとする。

(J.Zabarella, *In Duos Aristotelis libros Posteriorum Analyticorum*, p.110, in *Opera Logica*, (1608), 1966.) というのも、[P] に対応する後件は [R] と [S] という「連続的な全体」だからである。さらに Zabarella は [P'] が [P] に対する理由を与えていると解する。彼は「そしてその理由は、事物の何らかの根拠が存在しなければならないからということである」と述べる。(ibid, p.1110)

Philoponus たちはアリストテレスの議論を次のように理解している。

$((P \wedge P') \rightarrow Q) \wedge (R \rightarrow S)$

他方、Zabarella はそれを次のように理解している。

$(P' \rightarrow P) \wedge ((P \wedge R) \rightarrow S)$

詳しくは拙稿 Aristotle on Explanation, Part.II, p.19ff 参照。

- (19) 例えば, R.Mckirahan, *ibid*, p.200. Barnes はこれを「奇妙さ」と評している (*ibid*, p.220)。
- (20) この代替原理のアイディアは D.Charles に負っている。eg. *ibid*, p.199.
- (21) Barnes はこの箇所を “Hence it is plain that in some cases what something is is immediate and a principle”(ibid, ad loco.) と訳している。この文の主語はものではなく「何であるか」とされる。そのように訳することができない四つの理由については拙稿 Aristotle on Explanation, Part II p.37ff 参照。
- (22) 私は Ross 等と異なり heteron aition tēs ousias の属格を genitive of comparison (比較の属格) としてではなく genitive of connection (関連の属格) として読む。cf. Smyth, *ibid*, p.326. その理由については、拙稿 Aristotle on Explanation, Part II, p.39 参照。
- (23) この引用箇所は D. チャールズがパットナム等の現代の本質主義者たちとのアリスト

テレスの相違として、探究の第一段階において対象が存在するかさらにはその根拠がいかなるものであるかについての何らかの知識さらには何らかの見解なしにも持ちうる意味論上浅いものであることを説得的に展開したさいに論拠としたものである。チャールズは「アリストテレスは（私が第一部で論じるように）自然種語の意味と理解の説明を、使用者としてのわれわれに、私の現代本質主義者により前提されている程度の意味論上の深さを伴った意図を持つことを要請することのないものとして、展開した」と述べる。（*ibid*, p.15）ここで「意図」とはわれわれ通常人の「意味論上深い前科学的な指示上の意図 *our semantically deep pre-scientific referential intentions*」のことである。（*ibid*, p.9）彼のこの箇所を端初に展開した『命題論』『靈魂論』等を駆使して構築した意味論に関する壮大な仕事は今後、アリストテレスと現代哲学の思索の関連と差異、さらには総合をめぐり、現代哲学者を巻き込む大きな議論を引き起こすであろう。この問題に取り組むことは本稿の目標を超え、ここで取り組むことはできない。

- (24) 異なるが興味深い見解として、D.Charles, *ibid*, p.47f.
- (25) この点に関しては、前掲拙稿「アリストテレスにおける本質の非因果論的解釈」p.40 参照。
- (26) Alexandrus はこの箇所に次の解説を与えている。「何故にそれ自身はそれ自身であるかを語ることは、すなわち、何故に人間は人間であるのか、また何故に馬は馬であるのか、そして何故に牛は牛であるのかを語ることは、あらゆるものについて一つの説明言表であり一つの根拠である。というのも、答えるひとはなぜならそれは人間であるから、なぜなら馬であるからそしてなぜなら牛であるからと答えるであろうからである。しかし、その根拠が一つであるものどももまた一つである。従って、牛も人間も数において一つである。しかし、もしそれが不合理で不可能であるなら、何故に人間は人間であるかを問うてはならない。しかし、アリストテレスが語るには、恐らく誰かが何故に人間は人間であるか、そして馬は馬であるかを問われて、なぜなら人間であるから、またなぜなら馬であるからと言わないであろう、むしろそれぞれは自らに対してあることの故にと言うであろう。人間が人間であるのは、それぞれは自らに対して不可分割であることの故にと語ることは、なぜならそれは一つであるからと語ることに他ならない」（Alexandrus, *In Aristotelis Metaphysicorum Commentaria*, p.539. ed.M.Hayduck, 1891）。このようにアレクサンドロスも「何故にか」の問いに対するロギコスな応答の可能性を認めている。

付記

本稿の early versions は 1999 年 12 月 19 日にもたれた第 35 回ギリシア哲学研究会（於：中央大学）において読まれた。また平成 10・11 年度科研（基盤研究（B）（2）代表者田中亨英）課題「ギリシア哲学における存在と知識

の相互連関に関する基礎的研究」に報告された。本稿のテーマは長年考えたものであるが、近年の思索に対し Adam Beresford, 河谷淳, 田中伸司, 土橋茂樹, 中沢務等の諸氏との議論また協力から裨益するところ多く記して感謝したい。なお, David Charles 氏にとりわけ感謝したい。1985 年の書き初めから, 本年の *Aristotle on Meaning and Essence* (Oxford, 2000) の出版にいたるまで, 本稿と同じテーマに関する彼の思考の展開の証人となりえたことを心から感謝したい。15 年にわたる共同研究を通して, 提示された彼の独自で卓抜な解釈に, どれほど目を見張らされ, 喜びに溢れたことかを懐かしく想起する。